

戦姫絶唱インフィニット・シンフォギア—the twin edges of  
ZABABA—

U創世

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ISが生まれて10年もの歳月が経過した今日、IS学園に二人の『装者』が入学してきた。

——女神ザババの持つ二振の一つ『シユルシャガナ』と同じ名前を持つISの『装者』、月読調。

——そして同じく、女神ザババの持つもう一振りの刃『イガリマ』と同じ名前を持つISの『装者』、暁切歌。

これは、別の世界で『シンフォギア』と呼ばれた聖遺物の欠片を纏う『装者』達とよく似た者達が見せる、新たな物語——。

今、ISの世界で、歌が流れる——。

シンフォギア×ISのクロスオーバーがあまりないなと思つたので、勢いで書いちゃいましたw

下記の注意事項を読んで、オッケーな人は進んでください。ついてこれる奴だけついて来い!!

※注意事項

今作に登場するシンフォギアキャラは、平行世界の別の住人という

設定のため、原作に出てくる彼女達とは性格や境遇などが異なります。ただし、年齢設定などはGX時代に準拠しています。

また、今作に登場する第3型IS『シンフォギアシリーズ』は、名称こそ原作のシンフォギア装者が使用するものと同名ですが、独自の設定により、細部が異なる場合があります。あらかじめご了承ください。

また、原作では死んでしまっているキャラが生きていたりする場合もありますので、ご注意ください。

なお、この作品は他の作品の影響をいくつか受けてるかもしれません。そもそも踏まえた上で読み進めてください。

#### ※補足

セリフ枠は下記のものを参照の事。

「 →普通の会話

○ →心の声

□ →プライベート・チャネル

## 目 次

今作におけるシンフォギアキャラ・IS設定

第1話：始まりの調べ

第2話：再会とエリートとクラス代表と

第3話：昼休み、部屋割り、そして――

60 36 19 1

# 今作におけるシンフォギアキャラ・IS設定

※話の展開で今後加筆する可能性あり。

月読調

学年：1年

クラス：1組

今作の主人公その一。

『S·O·N·G コープレーション』に所属しており、同社が保有する第3世代型IS『シンフォギアシリーズ』の一騎、『シユルシャガナ』の装者を務める。

幼少の頃に両親を事故でなくし、身寄りとなる親戚もいなかつたためにマムことナスター・シャ教授の運営する『S·O·N·G』傘下の孤児院に預けられる。ここで切歌と出会い、同じ境遇や年が同じという事もあって、次第に仲良くなつていく。また、孤児院事態が篠ノ之神社の近くだつたため、篠や一夏達とは幼少の頃に知り合つている。

性格は原作と同様で物静か。原作で言えばGX以降の性格に近め。歌う事が好きで、さらに趣味としてヨーヨーとローラースケート、スケート等を嗜んでいる。特にヨーヨーは2個同時に扱えるほどの芸達者（筆者はその辺の知識が乏しいため、詳しくはわからないが、原作の調ちやんの戦闘シーンや変身シーンから、おそらくスタイルは3Aに近いと思われる。）。

ローラースケートに関しては、シユルシャガナの基本的な走行方法を学ぶのにちようどいいらしく、スケートに関して、時々近くのスケート場で滑つて いる光景がみられる そ う な。

また、手先が器用なので裁縫なども得意だつたりする。

使用IS：シユルシャガナ

調が使用する第3世代型IS。

『S·O·N·G コープレーション』の保有する『シンフォギアシリーズ』と呼ばれるタイプの一機で、4番目に完成したもの。レンジタイプは『近中距離型』。

スペック上は相変わらずの全身凶器で、基本的な攻撃方法などに原作から変化はないものの、『シンフォギアシリーズ』の中でも特に拡張領域<sup>バススロット</sup>の空き容量が多い（それでも一般的なISに比べると少ないが）ため、開発者である櫻井了子がたまに思いつきで製作した武装のテストを務める事もしばしばある。また、通常のISと違つて普通に歩行することが出来ない脚部構造をしている為、地上では脚部にいったローラーで移動するという方法をとつていて。

- 武装（×〇の〇部分は装備数、ただし予備は除く）
  - 頭部ヘッドギア内蔵式小鋸『百輪廻』（正確な総弾（？）数が不明な為、割愛）

調のよく使う武装の一つで、据え置きの射撃武装。小さな鋸型の弾を複数発乱射できる。

撃ち切るとヘッドギアが閉じ、その間に弾が補充される仕組みではあるが、後述する『正火車』を使用する場合は補充・装填していた小鋸は一旦拡張領域<sup>バススロット</sup>に格納され、ヘッドギアがもう一度元の状態になるまで使用することができないという弱点もある。

また、射撃武装とはいうものの、威力はともかく命中精度はお察しな為、もっぱら牽制用として扱われることが多い。

ただ、一応当たればそそここのダメージは通る上に発射時的小鋸の数も多いので、高速で動く相手や細かなミサイルの迎撃などに用いられることが多い。

名前の元ネタは原作の技の一つ『 $\alpha$ 式百輪廻』。

- 頭部ヘッドギア接続型大鋸『正火車』×4（予備も含めるとおそらくそれ以上ある）

調がよく使う武装の一つで、ヘッドギアに格納されているアームパーツを展開して接続される大型の鋸型近接兵装。これと先述の『百輪廻』を合わせたヘッドギア部分が一応、シユルシャガナ特有の第3世代兵装である。

その武器としての特性の関係上、使用中は『百輪廻』の補充・射出をすることができないため、『百輪廻』を使用する場合、一度この『正火車』を拡張領域<sup>バススロット</sup>に格納、または相手に向けての投擲などでアーム部

分から接続を解除し、ヘッドギアを元の状態に戻す必要がある。

原作ではもっぱら投擲技としての使用のほうが多い武装の一つだが、今作ではシンフォギアのように物理法則を無視したような武器の生成等は出来ない為、近接武器での使用のほうが用途としては大きい。

接続中はヘッドギアをアームとして、近くの敵を切り刻むように使う。また、鋸が回転している都合上、ヒットしている間相手のシールドエネルギーをゴリゴリ削っていくため、おそらくシユルシャガナの武装の中で一番ダメージの大きい武装の一つだと思われる。

さらに、鋸がかなりの大きさの為、防御用の兵装としても使用する事が一応可能であるため、射撃機相手には後述の『廻旋波』と合わせて、攻撃的な攻め方が可能となる。

また、アームパーツを各々分割することが可能で、アーム部分やヘッドギアの耐久性が脆くなる代わりに最大4枚まで装備することが可能であり、その際はまるで阿修羅のような怒涛の攻撃で相手を切り刻む。

### 名前の元ネタは原作の技の一つ『γ式弾火車』

#### ・非固定部<sup>アンロック・ユニット</sup>接続型プロペラ鋸『双月業』×2

シユルシャガナの武装の一つで、非固定部位に接続されているプロペラ型の鋸武装。おそらく、今作中シユルシャガナの武装の中で一番原作と使用法や設定が一番変わった武装だと思われる。

基本的には飛行中の軌道変更や加速・減速に使用するが、攻撃武装としても使用可能で、その際飛行能力は落ちるが、ヘッドギアを展開したものと似たアームに接続された状態で相手を攻撃することができる。ただし、『弾火車』と違つて投擲することは不可。

名前の元ネタは原作の技の一つ『緊急γ式双月カルマ』。元はヘッドギアに接続して飛行できるようにするものだが、IS自体が元々飛行能力を有しているためこういう設定になつた。

#### ・SEC内蔵型鋸ヨーヨー『廻旋波』×2

調が特に好んで使う武装で、両腕に装備されるヨーヨー型の武装。それぞれの内部にシールドエネルギー・コンデンサー（通称SEC）

というシールドエネルギーをため込んでおける装置が試験的に内蔵されており、装備時にはそこからヨーヨーのストリングのように腕部の中指にあたるアーマーにセットされる。

ヨーヨーの外側部分はヨーヨーの回転とは別に回転する機能があり、攻撃時にはそこから少しだけシールドエネルギーを用いて生成された小さな鋸が発生して、相手にダメージを与える。ただし、ストリング部分がシールドエネルギー由来なので、百式の『零落白夜』などのエネルギーを無効化する武装に弱く、そこをつかれると回収するまで使用不能になるという弱点も存在し、またヨーヨー型の武器である都合上、投擲から戻ってくるまでのタイムラグという、ある意味どうしようもない弱点も抱えている。

その代わり、ストリング部分が非物質であるため、距離を問わず使用できるという強みも持つており、ほかの武装と違つて使用できない状況もほとんどないため、使用不可状態の武装の隙を埋めたりするのにも一役買うこともある。

また、SECを積んでる関係で、接続さえ出来ればそこからエネルギーの補充が可能というタンク的な使い方も可能。シユルシャガナの場合、頭部ヘッドギアに収納箇所があるため、そこからエネルギーを補充する事が出来る。

名前の元ネタはスマホアプリ「XD UNLIMITED」で追加された技の一つ『 $\beta$ 式廻旋波』。

### 暁切歌

学年：1年

クラス：1組

今作のもう一人の主人公。

調同様『S·O·N·G コーポレーション』に所属しており、同社が保有する第3世代型IS『シンフォギアシリーズ』の一騎、『イガリマ』の装者を務める。

切歌も幼少の頃に両親を事故でなくしており、その為調と同時に同じ孤児院に預けられることとなつた。その後は調と同じ感じ。

語尾に「デース！」とつける癖があり、困った時には「デデデデデース！」など、何でも「デース」で誤魔化そうとするほど。なお、大抵誤魔化せてない。

勉強に関してはあまりよろしくなく、特に国語や英語等の筆記に至っては、調や切歌の事をよく知る人抜きではとても読めた代物ではないレベルで壊滅的（昔を知る調曰く「これでもマシになつた方」との事）。

調の事が大好きで、休み時間等はよくくつづいて行動しているほど。調も当然切歌の事が好きなので、ほぼ周りが公認するレベルでの百合カツプルとなつていて。なお、その光景を見て周りの腐女子達が今日も妄想を膨らませ、筆を進めてる模様。

上述の語尾や勉強面の話からお察しの通り、性格は原作通り。原作でだと調と同じくGX以降の性格寄り。

趣味は手紙を書く事とギターを弾く事。手紙は原作と違つて遺言めいた何かを書いて黒歴史を作るという事はなく、本当にただの趣味。ただし、初見の場合は知り合い、特に調を連れてこないと読めない代物なため、注意が必要。

ギターはかつて、軽音学部に所属していた経験があり、そこで担当してたのがギターだったのがきっかけ。

使用IS：イガリマ

切歌の使用する第3世代型IS。

『S.O.N.G コーポレーション』の保有する『シンフォギアシリーズ』と呼ばれるタイプの一機で、5番目に完成したもの。レンジタイプはシユルシャガナ同様『近中距離型』。

スペック上は然程原作から変更点はないものの、アンロック・ユニット非固定部位にてEW版デスヘルとエクスドライブモードの翼を足して2で割つたような外見の翼を得た事で、より死神のような見た目となつた。また、それにあわせてステルス機能を附加されており、これによりハイパーセンサーすらも誤魔化すステルス性を獲得、切歌自身の派手な立ち回りもあつて、かなり厄介な性能となつていて。

ただし、火力がシユルシャガナ等に比べると少し物足りない面もある

り、またステルス性能を維持する為のエネルギー消費量もそれなりにかかるので、それなりにピーキーな性能の機体となつてもいる。

なお、武装の名前が一部(?)大変読み辛くなっているが、これは装者である切歌の思考に機体が合わせた結果起こつてている事態らしく、これには流石の開発者の櫻井了子も「どうしてこうなつた?」と頭を悩ませてる模様。

## 武装

### ・大鎌『イガリマ』×2

イガリマを象徴する武装にして、切歌が最も愛用している大鎌型の近接武装。

鎌の部分はエネルギーを纏う事が可能で、これを用いる事で素の状態より斬撃の威力を向上させることが可能。また、この纏わせたエネルギーを3分割する事で、この機体唯一の遠距離武装『切・呪りeツTお』を発射することが出来る。

ただし、調のシユルシャガナの『廻旋波』と違つてまだSECを搭載していない為、火力を重視してこの機構を使いすぎるとすぐにエネルギーを枯渇しかねないので、切歌は基本は鎌として使い、必要に応じてエネルギーを纏わせ、『切・呪りeツTお』で牽制・射撃をするような使い方をしている。

また、後述のステルス機能を有効にしている場合、予備の一本を取りだして二刀流での戦い方をしたりする事もしばしばある。

### 元ネタはイガリマのアームドギアの基本形態の鎌。

### ・『切・呪りeツTお』

イガリマの大鎌武装『イガリマ』から放つことができるエネルギーの斬撃波。

3つの鎌の刃状のエネルギー波を同時に放つため、避けるのはそれなりに困難。威力としてもそれなりに大きいので切歌も使う機会が多く、開幕の牽制、射撃武装への迎撃、近接攻撃への布石等、汎用性も高い。

そのため、これを多用できるように切歌は鎌の改良を頼み込んでる模様。

元ネタは原作の技の一つ『『切・呪り e ツ T お』』。名前がそのままだが、原作が鎌の刃そのものが3つに分かれてそれを射撃していたのに對し、今作ではシールドエネルギーで生成された非物質の刃となつていてる。

・ステルス機能発生装置内蔵型非固定部位『アーラジン』

イガリマの機能の一つであるステルス機能を有効化する為の装置を内蔵した、死神のような翼の非固定部位。アンロックユニット

この機体の第3世代兵装となつており、かなり癖のある武装の一つ。

原理としては、機体の周囲にステルス機能を備えたエネルギー・フィールドを生成し、それにより肉眼以外では捉える事が出来なくなるレベルのステルス性能を發揮する。

ただし、この機能そのものが試験的な意味合いが強く、連続稼働時間が最高5分と短め。そして、一度使うと再使用まで最高10分ものクールタイムを要する為、使うタイミングには注意が必要な武装となつていてる。

その代わり、翼自体はミサイルにも耐えられるくらいの強度を持っているので、ステルス機能を有効にしていない場合、翼を盾代わりにすることも出来る。特に、ビームコードティングを施されてる関係上、その手の武装には滅法強い。

元ネタはスマホアプリ「X D U N L I M I T E D」で追加された技の一つ『幻姿・アーラジン』。

・肩部鎌刀内蔵型バーニア『P I N O 奇オ』

イガリマの肩部アーマーを構成している4つのバーニア兼近接武装。

4つの零状の物体に矢じりのような物体が合体した構造をしており、その矢じり部分が変形することで鎌刀を形成して相手を攻撃する。その際、アーマー内部に仕込まれているアームが伸び、さながら第2、第3の腕としても機能する。

また、この肩部アーマーにはバーニアが仕込まれており、加速中の方向転換や急加減速など、高速戦闘や近接戦での移動の補助も兼ねて

いるため、防御用の装甲というよりは攻撃・移動用の補助アーマーとしての役割が強い。

元ネタは原作の技の一つ『封伐・P<sup>ピノ</sup>I<sup>ノ</sup>N<sup>キ</sup>O<sup>オ</sup>奇<sup>オ</sup>』。

立花響

学年：2年

クラス：3組

原作『戦姫絶唱シンフォギア』シリーズの主人公で、調や切歌の先輩。

調や切歌、後述のクリスと違い、孤児院出身ではないが、トップアイドル兼IS操縦者として活躍している風鳴翼に一日会いたいと憧れ、IS学園に入学した経緯を持つ。

その後、入学して早々に父である晃が務める『S・O・N・G コーポレーション』に未来とともに見学に行き、そこで偶然、マリア用に調整、ロールアウトしていた『ギャングニール』を起動してしまい、企業代表候補生として『S・O・N・G コーポレーション』に半ば強制的に所属する事となってしまう。

最初は専用機を与えてもらえる事と、翼が所属している企業に自分も所属できた事で浮かれ舞い上がっていたが、ある事件をきっかけに、本格的に代表候補生としての自覚を持つ覚悟を決める。その頃に、『S・O・N・G』の社長で、翼の叔父にあたる風鳴弦十郎に師事し、特訓を付けてもらう。以来、弦十郎の事を『師匠』と呼ぶようになつた。

今は2年となつて学年が上がつた事で頼もしく成長はしているものの、原作同様相変わらず勉強は苦手なようで、未来や学友達にさんざん勉強やら宿題やらを手伝つてもらつている模様。

性格はほぼ原作通り（時間軸で言うとGX～AXZくらいの性格）で、好きなものは『ご飯&amp;ご飯』。趣味は人助け。自己紹介も相変わらず個人情報をばらまいていくスタイル。

使用ギア：ギャングニール Type-H

『S・O・N・G コーポレーション』の所有する『シンフォギアシリーズ

ズ』の一機で、3番目に開発された『ガングニール』の派生機。レンジタイプは『近距離特化型』。

元々はマリア用に調整された機体だったが、前述の偶発的な起動で装者が響に登録されてしまい、現在では彼女の乗機になつていてる。

『ガングニール』の基本コンセプトは本来、槍を用いての近中距離戦が主であるが、この機体は武器の取り扱いや武器の取り出しが苦手な響が乗る事を想定して再設計されており、腕部の装甲を切り替えて戦うインファイター用の設計になつていてる。その為、本来の『ガングニール』と違つて中距離からの砲撃戦能力がオミットされた代わりに、装甲の強化が施され、さらに空いた拡張領域にシールドエネルギータンク（通称SET）をこれでもかと増量しているため、通常のISのおよそ2～3倍近くのエネルギーを保持している。このSET等に詰まつたエネルギーを腕部装甲に内包し、殴りつけた時に開放してぶつけるのがこの機体の基本設計である。

なお、『Type-H』の『H』は響の頭文字と、その手に何も持たない『Handleless』のダブルミーニングである。

#### ・バンパー一体型腕部装甲『撃槍衝打』×2

Type-Hの基本装備で、試合開始時は基本この装甲が腕に装着されている。

この腕部装甲は、肘に近い部分の装甲がスライドするようになつており、そうする事で内部のバンパーを露出させ、相手に殴りつけた時にバンパーがそのまま元の位置に戻ると同時に、内部にため込まれていたSEをそのまま相手に塊のようにぶつける事が出来る。

この機構は連続使用も可能で、後述のマフラーと組み合わせる事で、1対多の状況において光速で駆け抜けながらSEをぶつけまくるという荒業も可能。

また、この装備のみ周りに衝撃波を発生させることが可能で、響が普段の特訓で会得した『発頸』等の武術を応用して、全方位に衝撃波を発生させて相手を吹き飛ばすといった事も出来る。

#### ・ブースター兼ドリル一体型腕部装甲『撃槍裂破』×2

Type-Hの必殺武器の一つで、響もよくフイニッシュに用いる最強武装。原作おなじみ、『スクラップファイスト』時に使つたアレである。

腕部に大型ブースターがついており、点火する事で通常のガングニールのブースター込みで凄まじい勢いのまま対象に突撃し、殴りつけた瞬間上部装甲がスライド、相手に『撃槍衝打』以上のSEの塊をぶつける。その一撃はとてつもなく、通常のISであれば下手をすると、受けただけでSEの三分の一は軽く持つていかれるレベルである。開発者の櫻井了子曰く、『最大出力なら、もしかしたらアリーナの隔壁を破れるかも?』との事。

また、ブースター部分を展開・回転させる事でドリルモードとなり、某天元突破口ボットよろしく、あらゆる障害をぶち抜きながら突撃する事も可能。

元ネタはXDで名称化された技『我流・撃槍裂破』。

・マフラー兼SE貯蓄型加速コンバーター『弾突砲雷』

Type-Hの首部分に設置されているマフラーユニット。

普段はただのマフラーでしかないが、内部に貯蓄されたSEを解放する事で、一時的に機体を超加速モードへと移行し、某携帯ライダーのアク○ルフォームのように千分の一とまではいかないまでもそれに近いレベルでの加速が可能となる。この状態で『撃槍衝打』を連打しようものなら、超加速モードが終わる頃には、恐らく2、3機確実にSEを切らしてしまいかねないレベルのダメージを与える事が出来る。その為、普段はこの装備は使用制限がかかっており、『S.O.N.Gコードレーション』本部で使用許可が出ない限りは制限は解除されない。

名前の元ネタはXDで名称化された技『我流・弾突砲雷』。この力ードを作者が持つていなかったためモーションが分からぬが、wikiの最大覚醒イラストで一番それっぽかつたので採用した。

・バンパー一体型脚部装甲『空鎧脚』×2

Type-Hのもう一つの基本装備。

脚部からそれぞれ3対のバンパーが飛び出すことで、加速、減速、踏

ん張り、蹴りの威力向上等、様々な用途で使用する事が出来る。腕部装甲武装と同じく、S Eを内包しているため、バンパー解放時のS Eをそのまま相手にぶつける事も可能。

元ネタはX Dで名称化された技『我流・空鎧脚』。

小日向未来

学年：2年

クラス：3組

調や切歌の先輩で、響の親友（というか嫁）。

響とは幼馴染であるが、そのやり取りは傍から見ると『夫婦』のそれにしか見えない。

響と一緒にI S学園に入学するも、響が『S. O. N. G コーポレーション』の企業代表候補生になると知ると、自分も響と同じ場所に所属したいと希望し、入社試験や適性検査などの結果、当時開発中だつた『シンフォギアシリーズ』の7号機『神獣鏡（シェンショウクン）』の装者となる事で、響と同じ企業代表候補生となる。

普段からほぼ響と一緒に行動しており、響の事は性別という垣根を越えて大好きな模様。その為、周りからは公認カツップル扱いされており、彼女の事を『響の嫁』と呼ぶ人もいる。また、そんな彼女達を題材にしたアレな本も、本人達の与り知らぬ所で量産されている模様。性格は響と同じく、原作GX～AXZくらいの性格。

使用ギア：神獣鏡

『S. O. N. G コーポレーション』の所有する『シンフォギアシリーズ』の一機で、7番目に開発された機体。レンジタイプは『中遠距離型』だが、近接戦武装も備えている。

元々基本設計だけは了子も完成させていたのだが、肝心の乗り手に足る装者の候補がなく、お蔵入りしていた。

が、そこに響の後を追うように入ってきた未来の適性を調べた結果、神獣鏡とのマッチングが上手いく事が分かり、開発が再開される運びとなつた。

この機体は、普段の出力自体は並みのI Sより少し上ぐらいで、『シ

ンフオギアシリーズ』の中でもあまり強い機体という訳ではないのだが、この機体特有のシステム『退魔輝システム』によつて、遠距離からのエネルギー武装の一つ一つが『零落白夜』同様シールドエネルギー由来のものを無効化する性質があるため、舐めて掛かると痛い目に合う。このシステム自体は、後に一夏の『白式』にも応用され、その為原作の『白式』と違い、本作の『白式』は多少なりとも拡張領域が空き、射撃戦用のレーダーサイトもばっちり装備されている。

- ・扇型可変銃『閃光』×2

#### 神獣鏡の基本武装の一つ。

基本は扇を閉じた状態に銃のグリップと剣の柄が合体したような持ち手をしており、その状態で銃のように射撃する。また、銃自体の耐久性がいいため、このまま殴りつけるといった使い方も可能。

また、扇部分を円状に展開する事で、前方の広範囲に細いレーザーを何本も放つことが出来る。

#### 元ネタは原作の技の一つ『閃光』。

- ・脚部装甲一体型超高エネルギーレーザー砲『流星』

#### 神獣鏡の最強武器にして、唯一の固定武装。

普段は背中で一对のリボンによる有線接続がされており、そのリボンによつて鞭のような攻撃をする事はできる。

そして、脚部装甲に接続する事で環状に左右のユニットが接続され、エネルギーが収束して極太のレーザーとなつて対象を襲う。このビームの直撃を受けた場合、まず間違いないく並みのISはSEを0にされてしまうぐらい、性能が凶悪としか言いようがないものとなつているが、1発撃つためのチャージに約5秒もかかるてしまうため、基本的に後述の『混沌』や、ツーマンセル以上の仲間との連携が不可欠となる。

#### 元ネタは原作の技の一つ『流星』。

- ・小鏡型リフレクタービット『混沌』×8

神獣鏡の要の武装で、第3世代兵装。普段は脚部装甲裏、もしくは拡張領域か非固定浮遊部位にしまわれている。

普段は高出力の射撃しかできないが、一度何らかのビーム・レーザー（相手のでも可）が本体に当たると、鏡のごとく反射しながら相手を追いかけていく。この反射時に自身が持っているSEも付加するため、反射し続けければし続けるほど、威力が上昇していく使用となっている。

元ネタは原作の技の一つ『混沌』。本来はレーザーを打つ事しかできず、反射はエアキャリアが射出したシャトルマーカーで行っていたが、本作では両方の機能を併せ持つた、ある意味極悪武装として仕上がっている。というか、あまりにセシリアルメタな感は否めない。

### 雪音クリス

学年：3年

クラス：2組

調や切歌の先輩で、調達同様『S・O・N・G』傘下の孤児院出身。あちこちの方言を色々交えた独特的喋り方をするのが特徴。

両親は『雪音雅律』と『ソネット・M・ユキネ』という有名な音楽家であったが、両親のNGO活動についていつた結果戦火に巻き込まれ、両親は死亡。本人もあわやというところだったが、どうにか『S・O・N・G コーポレーション』によって救出はされる。

しかし、両親を失った際に負った心の傷は大きく、孤児院に来てからしばらくは、周りとの接触を避けて塞ぎ込んでいた。

その後、マリアやナスター・シャ教授の努力もあって心を開いていき、中学に入る頃には周りの面倒を見れるぐらいには快復した。

その後、『S・O・N・G コーポレーション』における適性検査の結果、ロールアウトしたものの使い手がないなかつた『シンフォギアシリーズ』の2号機『イチイバル』の装着となるも、当初は両親を奪つた『兵器』を使う事への躊躇いから、戦う事を嫌っていた。が、IS 学園に入学してしばらくした頃、直属の先輩であつた風鳴翼に『力は他者を傷つける事も出来るが、守る事も出来る。自分達の力は、その為の物だ』と諭され、ISと向き合う覚悟を決める事となる。

現在は翼が卒業し、代表候補生としては1番年上となつたため、翼

のよう<sup>に</sup>先輩風を吹かせられるような立派な先輩であろうとしている。が、たいてい上手くいかず、空回りする事もある。また、本人の口調が少し喧嘩腰な時もあり、その独特的の喋り方から苦手意識を持たれることもしばしばあるようで、本人もそれを払拭したがつて<sup>いる</sup>模様。

性格はひびみくと同じく原作GX～AXZくらいの性格。「ちょせえ！」等の独特の喋り方は今作でも健在。

使用ギア：イチイバル

『S.O.N.G コー・ポレーション』の所有する『シンフォギアシリーズ』の一機で、2番目に開発された機体。レンジタイプは『中遠距離型』。

広域殲滅を目的とした機体で、腕部・腰部の装甲が射撃武装となる等、全身火薬庫みたいな性能を持つのが特徴。その全てがだいたいミサイル等の実弾系武装のため、その弾がありつけ拡張領域に突つ込んでいる事によつて、後付武装等の搭載はほぼ不可能。代わりにとてもないバ火力を単機で発揮する事が可能なため、一対多等はこの機体の望む所である。

なお、搭載武装は単機でも他の機体とは比べ物にならないレベルで搭載しているため、後述の武装はほんの一部である（それでも多いが）。

・近中距離射程9mm口径ピストル『ICHAI VAL』×4

イチイバルの要の武装である、2丁の赤いピストル。この機体の第3世代兵装の核となる武装もある。

この武装を各種アーマー<sup>や</sup>装備に接続する事で、各装備をアクティブに出来る機構を有しており、それらの各種アーマーも含めて、この機体の第3世代兵装となつて<sup>いる</sup>。その為、この武装の喪失は、イチイバルの殆どの手持ち武器の使用が不可能になるのと同義である。一応、無しでも戦えない事はないが、その場合自衛力が脆くなるため、推奨はされない。

この拳銃はイチイバルの唯一苦手な近接戦で使用可能な武器で、3発の9mm弾を連続射撃できる3点バーストの機構を備えており、弾

が切れても腰部の装甲から自動で拡張領域内にあるマガジンが引き出されてアームによつて自動装填されるスピードローダー機構があるため、弾切れに関してはほぼ心配がない。総弾数は1マガジン辺り24発ほど（原作も多分それぐらい？ ギアで生成できるからわからん）。

元ネタは原作でクリスチャンがよくガン＝カタする際に使つてゐる拳銃。

## 2 腕部装甲接続型クロスボウ『QUEEN, s INFERN』×

イチイバルの腕部装甲の一部を『ICHIVAL』に接続・合体する事で起動するクロスボウ型のレーザー射撃武装。イチイバルの武装の中でも取り回しがよく、弾数を気にしなくていいエネルギー系の武装のため、中遠距離では主にこの武装を使って戦闘を行う。

クロスボウ型の武装であるため、1丁あたり同時に3～5発ほどのエネルギーの矢を放つ事が出来、またエネルギーの矢を番える装甲部分を展開する事で、一度に発射する矢を最大3倍にまで増加させることが可能。

また、中央部分を延長する事で大型の結晶の矢『GIGA ZEPPELIN』を射出する事が可能。

元ネタはイチイバルの基本アームドギアと、原作の技の一つ『QUEEN, s INFERN』。原作を見てる感じ、矢を番える部分が展開しているぐらいの違いしか見受けられたんかったため、後述の『GIGA ZEPPELIN』と共に一つにまとめた

### ・『GIGA ZEPPELIN』

『QUEEN, s INFERN』から射出される大型の結晶の矢。

その実態は結晶でできた炸裂弾の塊で、射出されて一定の高度まで上がると自動で分離し、その後地表に向かつて大量に降り注ぎ、範囲内の敵を纏めて薙ぎ払う。また、広範囲に大量の小さな炸裂弾がばらまかれるため、一度射程範囲に入つてしまつた場合、回避行動をとる事はほぼ不可能となつてゐる。

元ネタは原作の技の一つ『GIGA ZEPPELIN』。こちら

も上述の『QUEEN, S INFERNO』同様、クロスボウの中央部分が伸びるぐらいの違いしか見受けられなかつたため、同一武装のモード切替で射出できる武装とした。

- ・強化装甲付きスナイパーライフル『RED HOT BLAZE』  
拡張領域内に格納されているスナイパーライフル。『ICHAIV AL』を接続する事で起動するのは『QUEEN, S INFERNO』と同様。

イチイバルのヘッドギアに搭載されているレーダースコープにより、対象を逃がすことなく狙撃する事が可能。また、レーザーのように一直線に飛ばすだけでなく、狭い範囲だが拡散射撃としても打つことが可能。

さらに、『強化装甲』とついているだけあって銃身で殴る事が可能で、不意の奇襲にクリスも時たま使用する。

元ネタは原作の技の一つ『RED HOT BLAZE』と、『XD UNLIMITED』で追加された技の一つ『SPREAD ZEPPELIN』。ライフルとして射撃された事はアニメではなく、殴る用で一度だけ戦果をあげた。その後、3・5部にてようやく射撃武器としての面目躍如を果たした。（なお狙撃はしない模様）

- ・4門3連ガトリング砲『BILLION MAIDEN』

上述の二つ同様『ICHAIVAL』を接続して起動する4門の3連ガトリング砲。

クリスの好んで使う武装の一つで、大量の弾丸をばらまいて相手にダメージを与える。

弾幕の量が凄まじく、並の武装だと防ぐ事すら敵わないほど。その上、弾切れの心配が少ないほど弾数が多く、まさに『BILLION（1億）』の名にふさわしい性能を持つ。

ただし、それほどの弾数を内部に格納しているためか銃身が重く、とても他の射撃機体では持てないほど。それをイチイバルでは片手に持つて二丁同時に構えられるので、まさにイチイバル専用の武装といつても過言ではない装備となっている。

元ネタは原作の技の一つ『BILLION MAIDEN』。たぶ

んクリスちゃんの武装の中で、1、2を争うぐらいの知名度があると思う。

### ○『S・O・N・G コアポレーション』

調達が所属するIS企業。社長は風鳴弦十郎。

表向きは新興のIS企業であるが、裏では紛争地帯での救助活動等をしている。また、救助活動中に見つけた孤児達を、自社が保有する孤児院で可能な限り保護するなど、NGOとしての側面も持ち合っている。

オリジナルの第3世代として、後述の『シンフォギアシリーズ』と呼ばれる機体をいくつか製造・保有しており、調や切歌のISもこのシリーズに属している。

### ○『シンフォギアシリーズ』

『S・O・N・G コアポレーション』が保有する第3世代型IS。

第3世代とは言うものの、その性能は機体によつて差はあるとはいえ、半ば第4世代に片足を突っ込んでるレベル。

レンジタイプが基本的に近距離寄りの機体が多く、どの機体も神話や架空の武器の名前を持っているという共通項があるが、最大の特徴は、『機体の乗り手となれるのは、IS側が認めたもののみ』という、主従逆転の現象が発生している点である。

これは、開発者である櫻井了子の研究分野である『ISコアの潜在意識の研究』の結果生まれたもので、ISコアの潜在意識に最もマッチした心象をもち、かつIS側が、その乗り手とIS側の相性がベストである場合に、初めて『シンフォギアシリーズ』の乗り手となれる。この点により、『シンフォギアシリーズ』用に特化した専用の『剥離剤<sup>(リムーバー)</sup>』でもなければ剥がせないほど、乗り手とISに密接な繋がりが齎されている。

また、どの機体も固有の第3世代兵装とは別に、共通の第3兵装機構『シンフォギアシステム』を搭載しており、聖詠を詠える事で、機体自体にかかつっていたロックの一部が外れて出力を高め、エネルギー

効率を向上させる事が出来る。また、この時に機体側から乗り手の心象に合わせた音楽が流れ、脳にその音楽の歌詞情報をダイレクトに伝え反映させ、それを操縦者が歌い続ける事でより出力を上げる事が出来る。その為、『歌いながら戦う』という、他に類を見ない戦い方をする事から、『シンフォギアシリーズ』の乗り手は『（シンフォギアシリーズを）奏で装備するもの』という意味で『装者』と呼ばれている。

#### ○『シンフォギアシリーズ』の部分展開

システム面に特異なものがある『シンフォギアシリーズ』だが、それ以外は既存のISと何ら変わらないため、部分展開も通常通り行える。ただし、その場合の出力は『シンフォギアシステム』を起動している時よりも著しく減少してしまったため、あくまで瞬間にISの一部を使用したい時や、全展開が不可能な状況下での非常用機構である。

# 第1話：始まりの調べ

??? side

## 風薫る春の季節——

それは、おそらくこの日本という場所に住んでいれば誰でも——特に新しい人生の門出を迎える人達は——感じられるものだと思う。笑顔を——

「…………ハア～…………」

——いや、いた。一人だけ例外が。しかも、初日から溜息を吐くぐらいの。まあ、境遇が境遇だから、仕方ないのだろうけど。それにしたって、あの落ち込みぶりはないと思う。

でも、それも致し方ない事なのかもしれない。だって、彼は世界で初の『男性IS操縦者』となってしまい、女子の花園たるここ『IS学園』に半ば無理やり入れられたようなものなのだから。まあ、そもそもの話、試験会場を間違えるなんていう、バカみたいなミスをしなければ、こんな事態にはなつてないのだけれど。試験会場の地図でもらつてたのに、なぜ間違えたのだろうか。ほら、隣のあの『切ちやん』ですら、呆れてものも言えなくなつちゃってるし。

とはいえ、あのままじや満足な喋りや自己紹介もできないだろうし、幼馴染（？）として、助け船ぐらいいは出そうかな。ハア、こういうのはガラじやないけど、仕方ない。

(・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・)

あー、どうしてこんな事になつちまつたんだ。もしあの時、試験会場を間違えず、ISに触れたりしなければ——、いや、今さらそんな事を言つても仕方ねえ。・・・とはいへ、この大量の視線はなあ。

まあ、『本来女性以外が動かせないISを世界で初めて動かした男』、つてなつたら、そりや珍しく見えるのか。こう、ツチノコとかみたいな・・・、いや、それは言いすぎか。昔のパンダを初めて来た時、と同じ状況、の方が近い、のか？

IS——正式名称、インフィニット・ストラトス。

10年前、天才科学者篠ノ之東によつてもたらされた、宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ……なんだが、現状、今ではスポーツの道具の一つや、軍事兵器としての意味合いが強いものとなつてしまつている。前者はともかく、後者はおそらく、その発表後に起こつたあの事件、『白騎士事件』の影響だろうと思うが、それは今回は割愛しよう。

で、何でさつき俺、織斑一夏が、自分の事を『本来女性以外が動かせないISを世界で初めて動かした男』といったかと、このIS、『女性にしか扱えない』という、最大の欠陥を持つてゐるのだ。その為、必然的にそのISを学ぶここ『IS学園』も女子しかいないはずなのだが、何の因果か、俺はたまたま試験会場を間違え、偶然そこにあつたISを興味本位で触れて動かしてしまい、ほぼ半ば強制的にここに入学させられたのだった。

まあ、おかげで絶賛檻の中のパンダ状態を味わつてるんだけどな。世の中には『ハーレム万歳!!』、とか言つてる男達がいるかも知れないが、そういう人達は一回同じ経験をしてみたらいいと思う。絶対嫌に

なるから。

ただまあ、そういう視線じゃないのもあるにはある……二つほど。一つは、さつきからすぐえバカを見るみたいな呆れた顔で見てくる隣の金髪の自称常識人の幼馴染、『暁切歌』。何で自称、なのかといふと、切歌のいう常識っていうのが、大抵常識はずれな事がが多いからつていうのと、後はその、切歌は趣味で手紙を書いたりするんだが……。これがまた、ひどい誤字だらけで、しかも英語、漢字、ひらがな、カタカナごちゃ混ぜの『読みだけ合わせました!!』みたいな手紙で、初めてもらつた時、調がいなかつたら本気で落書きか何かと勘違いしてたかもしちゃねえ。

ただまあ、切歌は今こう呆れた感じの表情だが、普段はもつと底抜けに明るかつたりする。能天氣、とは言わないけど、有り体な言い方をするなら、『ムードメーカー』的な存在なのだ。それに、どっちかというと表情が表に出やすいから、どう思つてるかも分かりやすいしな。

あと、1年前に切歌ともう一人、後ろから感じる視線の主の一人は、向こうの都合でしばらく会えていなかつたのだが、ISを動かしてから数日後、千冬姉に頼まれたからつて理由で、わざわざ俺の家まで来てくれたりもした。俺としてはとても助かつたし、何よりISについて色々と教えてくれたりもしたので、持つべきものは友達だなと思つたりもした。何だかんだ、切歌とそのもう一人は、同年代では一番関わりが長かつたから、ほぼ腐れ縁みたいなものもあるのだ。

・・・が。さつきも言つた通り、絶賛切歌は俺を呆れながら、バカを見るみたいな目でずっと見てるのだ。おい切歌、さつきから何でお前そんな人をすぐえバカを見るみたいな顔で見てくるんだよ。俺お前になんかして――

(：) ゆ力キカキツ  
・△・) / チラツ

——ん、何々？「今皿デスけド、何でうご菓子やがつたんD e a t h力、このトーエ变撲!!（#、O、）ノ」、だと？ 知るか、こつちが聞きたいわ!! つーか、その誤字しまくり変換の癖、まだ治つてなかつたのかよ。後、顔文字がやけにリアルなんだが…。といふか、お前もアイツと一緒に来てたんだからホント今更——

トントンッ

「つて、うわあつ!?」

な、何だ!? 今何か肩をトントンつて・・・つ、まさか!?

「ジ——————」

ヒイイイイイイイイイイイイ! ··· 見てる、めつちや見てるよ!  
まるで穴が開きそうなレベルでこつちを見てるよ!! いやまあ、誰が見てるかつていうと、さつき言つてたもう一人の腐れ縁なんだけどさ。

俺のもう一人の腐れ縁、『月読調』。

切歌と同じ時期に知り合つた、俺の幼馴染の一人でもある。つい先程、切歌の事を自称常識人といったが、正直、常識に関しては調の方がちゃんとしてるとと思う。まあ、たまに突飛な行動に出る事もあるが。

それと、調は切歌と違つてあまり感情が表に出ないから、正直最初の頃は、話してて何を考えてるのかわからなかつたりもしたが、今ではだいたい、どういう気持ちで話してるかつていうのが分かるようになつた。切歌は細かな表情まで何となく分かるらしいが、俺はまだそのレベルではないらしい。

後、調は手先が器用で、家庭科の授業とかでよくやる裁縫とかもす

げえうまい。そして、その手先の器用さは、調の趣味のヨーヨーでもよく発揮されていて、見ててすごいかつこいいんだよな。この前来た時に久しぶりに見せてもらつたけど、アイツまた上達してたな。今度夏休みに大会があるとか言つてたから、都合が合えば見に行つてみるか。

まあ、それはともかくとして。調、いつの間に俺の後ろにいたんだ?! さつきまで何の気配も感じなかつたぞ!!

「あつ、調!!」

「切ちゃん、おはよう。」

「おはようデース!!」

「あつ、後一夏もおはよう。久しぶり。」  
「お、おう。久しぶり。」  
で俺見てたよな?

切り替え速いな、オイ。

「んもー、調。そんなトーヘンボク、放つといていいじゃないデスカ。」「そういう訳にもいかないよ、切ちゃん。一応、これでも幼馴染なんだし。何より、腐れ縁だし。」  
「・・・まあそうデスケド。」

「それに、このままだと一夏、ガチガチに緊張してまともな自己紹介も出来なさそうだし。なら、幼馴染の私達と話してたら、ある程度緩和されると思うから。」

し、調。お前、そこまで考えて・・・! ありがとう、持つべきものは友達、いや、幼馴染だぜ! よし、今度何か奢つてやることにし

よう。何がいいだろう？ ヨーヨーも何かと体力使うとか言つてたから、スポーツドリンクとか――

「ジーーー。」

「な、何だ？」

「・・・今、変な事考えてなかつた？」

「か、考えてないぜ。」

「・・・ホントに？」

「ホントだつて！」

「怪しいデース。」

「切歌、お前もか！」

あく、もう！ どうしてこうなつた!! 僕はただ、調に何かお礼に奢ろうつて思つただけなのに。それにしてもコイツら、ホント仲いゝな。息ぴつたりつていうかさ。今発揮しなくてもよかつたが。

さて、ここで下手な回答をするとヤバい事になるつていうのは、小さい頃からその被害に遭つてきた僕にはよく分かつてる。ちよつとでも嘘っぽい素振りをすれば調からガン見の刑、かといつて素直に答えたら切歌が騒ぐし。ハア～、どうしたら――

ガラガラ

「は～い、皆さん。席に着いてください。S H Rを始めますね～。」

「来た!! 先生ナイスタイミング!! 助かつたぜ。」

「・・・チツ、時間に助けられましたか。」

「じゃあ、また後でね。」

「あ、ああ。」

調は俺の返事を聞きながら、自分の席へと戻つていった。ふう、こ

れでとりあえず、さつき考えてた事に対する追求はないだろう。調は元々、この手の話でそこまで引きずるタイプじゃないし、切歌だつて成長してるだろうから、たぶん追及される事はないだろう。それに気持ち程度かもしれないが、調と切歌と話したおかげで、ちょっとだけ気持ちに余裕が出てきた気がする。

さて、色々考えるのはここまでにしよう。思考を現実に戻すと、学校ではよくある先生の自己紹介をしていた。今さつきいいタイミングで入ってきた先生は、『山田真耶』先生というそうだ。話してると感じ、すごいおしとやかな先生って感じがした。ただ・・・、うん、この際だからはつきり言つてしまおう。デカイ。女性にとつて特徴的なあそこが、かなりデカイのだ。切歌や調だつて、同年代で見ればそこそこ大きい部類だと思うけど、あんなにデカイのは見た事な——  
ガンツ

「イツテエ!?

「お、織斑くん!? どうしました!?

「い、いえ。大丈夫です。ちょっと、足の小指が・・・。」

「そ、そうですか。あの、本当に痛かつたら言ってくださいね。保健室に連れていきますから。」

「・・・はい、ありがとうございます。」

クツソ、切歌のヤツ。アイツ思いつきり俺の足踏んづけやがったな。いくら隣の席だからって、やつていい事と悪い事があるだろう? そう思いながら踏んづけてきた本人を睨もうと目線を向けると――

「♪♪♪♪」

――窓の方を向きながら、めっちゃいい音程で口笛吹いてやがつた。しかもアイツ、前より上手くなつてやがる。なんか、地味に腹立つな。

まあ、こんな事がありはしたが、先生の自己紹介が終わって、いよいよ俺達生徒側の自己紹介が始まった。

---

s i d e 切歌

フウ～、何とか誤魔化せたデス（；Д、）

それにもしても、一夏は相変わらずのドスケベなのデス。うちの先輩達と会つた時だつて、あんな風にいやらしい目を向けてましたし。今度あんな目向けてたら遠慮なくヤつてやるのデス。

・・・と、そんな話をしてたら、手前の人々の自己紹介が終わつたみたいなので、自己紹介させてもらうのデス！

「初めまして、暁切歌デス!! 『S·O·N·Gコーポレーション』の企業代表候補生つていうのをやらせてもらつてるデス!! よろしくデス!!」

『『『ガタツ!!!』』』

ン、なんか皆がずつこけてますが、どうしたんデ s——

{きりちゃん~?}

「つ!?

つ、い、今の声はまさか・・・!? マズいデス、私の予感が的中し

ていたら——。そう思いながら、急に背中を走った悪寒に対する予感に従つて視線を後ろに向けると——

「ジ――――――――――――――――――――――  
「ヒイイツ!?」

お、怒つてるデス。激おこの調が無茶苦茶私をガン見してるデス！  
例えるならそう、この前やつた古いゲームの英雄さんが言つてた、『真の英雄は目で殺す』つていうぐらいの勢いで見てきてるデス!!  
ヤ、ヤヤヤヤバイデス!! と、とにかくこの空気を何とかしないと!!

「あ、あと、趣味は手紙を書くこと、ギターを弾く事デス!! い、以上デス!!」

私が自己紹介を終えて座ると、次の子がぎこちなさそうに自己紹介を始めてました。フウ、何とか乗り切つたデス……。それにしても、何が調の逆鱗に触れたんデスか？ そもそも、調が理由なく切れ るようなことは多分な——

〔切ちゃん、『企業代表候補生だいひょうこうほせい』だつて、昨日散々言つたよね？〕

〔あつ・・・。〕

し、しまつたデス。そういえば昨日、自己紹介の練習みたいなのを一夏の家でやつた時に、調に指摘されて直したのに、まさか本番でまた同じことをしてしまうとは……。これは大目玉をもらつても仕方

ないのデス。

「・・・もしかして忘れてた?」

「・・・ごめんなさいデス。」

「・・・後で突っ込まれてもフォローはするけど、責任は自分でとつてね。」

〔はい。〕

ハア〜、これはもしかしたら放課後、部屋でいろいろ言われるかもデスね。うう〜、まさかこんな初步的なミスを私がやってしまうなんて・・・。ハツ、そういえば、私たち以外の代表候補生、このクラスにいませんよね!? いたら割とマジで色々と社会的にヤバ――

――因みに、筈の近くにいる金髪の子、イギリスの国家代表候補生だから、後で何か言われるかもね。〔デデデデース?!?〕

!?!?!

――この後しばらくの間、私が恥ずかしさのあまり悶絶してたのは内緒デス。

あ～あ、切歌のやつ。昨日調に突っ込まれてたのに、またやつちまつたのか。流石の俺でも、あれは擁護できないぞ。あつ、切歌がめつちや顔赤くして悶絶し始めた。大丈夫か？

ちなみに、俺は調と切歌から色々とIS関係の事を教えてもらつていたので、『代表候補生』っていう言葉の意味は分かつてる。まあ、読んで字の如くって言われたらそれまでなんだがな。ただ、知ってるのと知らないのでは、やっぱり違うし、何よりIS操縦者としては最低限知つておくべき事だつたっていうのもあって、後で恥をかかずに済んだつて思うと、教えてもらえた事に感謝している。

それと余談だけど、切歌が『企業』つてつけてたのでわかる人もいるかもだが、代表候補生には『企業』の代表候補生と、『国家』の代表候補生の二つのパターンがある。『国家』の場合はその国家に所属していく、『企業』の場合もまた然り。ただ、企業だと多国籍企業とかのパターンもあるから、国家と違つて、明確に『どこの国』の所属っていう事にはならず、その『企業』に所属しているっていう扱いになるらしいので、そこまで国籍とかをとやかく言われることはないそうな。まあ、国家代表候補生の場合も、例外は存在してるらしいが。さて、それはさておき、今は俺の一つ前の番号の人の自己紹介中だ。この後に俺の自己紹介があると思うと緊張するが、先ほど切歌が（本人には悪いが）派手にミスつてくれたおかげもあって、さつきよりもさらに余裕がある。落ち着いて自己紹介すれば、問題はないはずだ。そう考えていると、ちょうど一つ前の番号の人の自己紹介が終わつたみたいだった。さて、いよいよ俺の番だ。

「初めてまして、織斑一夏です。初めての男性IS操縦者として、この学園に入学することになりました。好きな事は映画鑑賞と修行、趣味は料理です。みんな、気軽に接してくれると嬉しいので、これからよろしくお願ひします。」

よし、何とかやり切った。変な注目を浴びないよう、無難な自己紹介内容にしたから、多分大丈夫なはず・・・！

「ほう、周りが女子だらけでガチガチに緊張して、まともな自己紹介も出来ていないと思っていたのだが。存外ちゃんとやれてるじやないか、織斑。」

「つ!?

えつ、今のは!? 聞き覚えのある、どころか、今まで何度も聞いてきた声がした方を向くと、そこにいたのは――

「――ちふ、つ、織斑先生!」

今俺に声をかけてきたのは、俺の自慢の姉であり、初代ブリュンヒルデという肩書きを持つこのIS学園の教師、織斑千冬。

小さい頃から色々と世話になりっぱなしで、俺にとつては頭の上がらない人もあるが、世間ではISの世界大会『mondgrotso』の初代優勝者にして、2連覇を達成した『世界最強のIS操縦者』として有名だ。今はもう現役を引退して、ここIS学園で教師をやっていきる。と言つても、引退してすぐの頃はドイツに特別教官として教導に赴いてたらしいが。

まあ、そんな事があつたりするが、俺にとつては自慢の姉であり、超

えたい目標の一つでもある。他にも目標はあるんだけど、それはまた、追々話す機会があれば話そうと思う。

にしても、危ねえ。危うくいつもの調子で『千冬姉』つて呼びそうになつたぜ。昨日調達から、千冬姉が I.S 学園で先生になつてゐるつて聞いてなかつたら、たぶん素で呼んでたわ。・・・アイツらにも、頭が上がらないな。まあそれはともかく、まだ二文字目までだから、ギリギリセーフだよな。

ポンツ

「言い直した辺りが、まだまだだな。だが、今回は見逃してやる。次はないぞ、織斑。」

そう言つて千冬姉は、俺の頭に軽く出席簿を当ててきた。その感じは何だか、幼い子供を叱る母親のような感じもした。実際、千冬姉がめつたに見せない優しそうな笑みを浮かべていたので、たぶんあつてるとと思う。ただ、表情に出せばたぶん本気で叩かれるだろうと思い、俺はなるべく、それを表に出さないように努めた。

「・・・フツ。」

な、何だ今のは笑い方？ ・・・まさか、表情に出てたか？ だとしたら、見逃してもらつたつて事か？

俺の戸惑いも他所に、千冬姉——織斑先生は自己紹介を始めた。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。私の仕事は、若干15歳を16歳までの1年で使い物になるまで育てる事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。逆らつてもいいが、私の言う事は聞け。・・・いいな？」

うわあ、聞いてはいたけど、本当に独裁系の指導なんだな。まあ、

世界最強<sup>ブリュンヒルデ</sup>としての千冬姉のカリスマ性が、これを可能にしてるんだろうけど、実際に聞くとちょっと複雑だな。これ、問題児とかがいたら結構面倒になつたりするんじゃ——

『アヤアアアアアアアアアアアアア!!!』

「?!?!」

「デデデース?!」

「…………!?」

な、何だ今の叫び声!? そんなに叫ぶ事あつたか?! というか切歌、そのびつくりした時とか困った時に言う「デデデデース」とか言う奇声、未だにあげてるんだな。まあ、それでこそ切歌らしい気はするが。

さて、さつきまで悶絶してた切歌だが、流石の皆の叫びにびつくりして恥ずかしさが吹っ飛んだようで、今どういう状況かを理解しようとキヨロキヨロしていた。そして、千冬姉を見つけて、「あつ、織斑先生! おはようございますデス!!」といった。千冬姉は一応手だけで反応していたが、それよりも、今の状況でまず切歌の声を聴きとれた事にびっくりしたわ。なぜなら、今のクラスの状況、あちこちで叫び声が上がってるんだよ。例えば——

「本物!! 本物の千冬様よ!!」

「私、ずっとファンでした!!」

「私、お姉様に憧れて、この学園に入学しました!! 山口から!!」

「私は北海道から來ました!!」

「あの千冬様に、ご指導していただけるなんて、嬉しいです!!」

「私、お姉様のためなら死ねます!!」

——とまあ、こんな感じで絶賛力オス状態で、とてもじやないが個人の声を聞き取る余裕なんかないだろうっていう状況なんだよ。後、一部突つ込んじやいけない言葉が聞こえたが、聞かなかつたことにし

よう。というか、中央当たりに座つてゐる調がそろそろ辛いんじやないか？ アイツ耳結構いいから、俺達以上に音量が聞こえてだいぶ辛いかもしれねえ。とはいへこの状況、一人の声で静めるのは——

バンッ!!

「静かにせんかバカ共!!」

——いや、出来たな。さすが千冬姉。というか、今叩いたの、俺の頭の上に置いたあの出席簿だよな？ あれ、本当に同じ奴か？ 音の出方が明らかに出席簿から出る音じゃなかつたと思うんだが。因みに、今の音で流石に叫んでいた生徒達も黙つたようだ。

静まつたのを確認してから、千冬姉はため息をついた。

「……ハア、全く毎年毎年、よくもこれだけのバカ者が集まるものだ。それとも何か？ 私のクラスだけに、これだけのバカを集中させていけるのか？」

あく、これだいぶイライラしてゐるかもな。というか、これ毎年の恒例なのかよ。まあ、『世界最強』だなんて肩書を持つてたら、こうもなるのはしようがないんだろうけど。流石にこれは弟の俺も同情するよ、千冬姉。俺はそう思い、今度家に帰つてきたらマツサージとか愚痴聞きとか、色々やつてあげる事にしようと心に決めた。

た、助かつた……。耳栓を咄嗟に付けたからよかつたけど、正直危なかつた。もしあのまま続いていたらと思うと、ちよつとぞつとする。流石に私や切ちゃんのISの特性上、耳をやられたらどうしよう

調 side

もなくなつちやうし。

それにしても千冬さん、この前会つた時から少しだけ疲れてるのかな？ まあ、実の弟である一夏が学園に入る事になつちやつたから、たぶんそれに関する諸々の手続きやら事情説明やら色々やる事があつたのだろうけど。

さて、自己紹介 자체はまた再開して、さつき箒とその近くにいたイギリスの代表候補生、確か、『セシリア・オルコット』さん、だつけ？

その子の自己紹介が終わつた所だつた。ちなみに、箒つていうのは一夏や私達の幼馴染で、ISの生みの親である『箒ノ之束』博士の実の妹、『箒ノ之箒』の事である。東博士がISを生み出した関係で、家族である彼女とその両親達は、要人保護プログラムというのによつてバラバラにされ、箒も、その関係で6年前に私達の元を離れていつてしまつっていた。正直、私はこの学園に来ると決まつた時に、会える予感はしていた。政府としても、東博士の妹にIS適性などを期待してゐる部分もあるだろうし、何よりここなら、どの国からの干渉も受け付けないから、保護もしやすい。そういう『日本政府にとつて』合理的な理由から、おそらく箒はここに一夏と同じく、半ば強制的に入学を強要されるであろうとは思つていた。まあ、流石に同じクラスになるとまでは思わなかつたけど。

それにして、この前新聞で見てびつくりしたけど、中学の剣道の大会で箒、優勝したんだね。以前から、『箒ノ之流』と呼ばれる箒のお父さんが教えていた剣道を嗜んでいるのは知つていたけど、箒の場合、何と言うか、ちよつと暴力的な剣が多い気がしてたから、正直丈夫なのかと心配していた時期もあつたし。でも、流石に大会だからそんな事はしてないと思つたけど。

まあ、箒に関してはこのくらいにして、もう一人の方、イギリスの代表候補生『セシリア・オルコット』さんについても、ちよつと気になる事がある。さつき自己紹介を聞いていたんだけど、どこか自分を誇示してゐる節があると思つたし、何より話してゐる感じからどうも、私の嫌いな『あの思想』に染まつてる気がした・・・。後、切ちゃんがミスしてた事をバカにしてる節もあつたから、ちよつと注意しておか

ないといけないかな。おつと、気になる事に関して考えるのはここまでにしておかなきや。そろそろ私の自己紹介の番みたいだ。

「初めまして、月読調です。切ちゃん、暁さんと同じく『S. O. N. G コーポレーション』の『企業代表候補生だいひようこうほせい』をさせてもらっています。好きな事は歌う事で、他にも趣味として、ヨーヨーやローラースケート、スケートも嗜んでいます。これから一年間、よろしくお願ひします。」

私が自己紹介を終えると、皆拍手を返してくれた。まあ自己紹介つていつたら、これくらい無難なものでいいと思う。正直、切ちゃんみたいなミスを連発したら、うちの会社の沾券に関わるし。．．．後でもし切ちゃんに、この事に対する追及があつたら一応フオローはしてあげるつもりだけど．．．。何だろう、ちょっとだけ気が重くなってきた気がする。『あの人』の幼馴染の人の気持ちが、今なら少しだけわかる気がする。

そして、各自の自己紹介はこの後滞りなく終わり、少し休憩時間を挟んで、1時間目の時間へと入つていった。

to be continued :

## 第2話：再会とエリートとクラス代表と

一夏 side

「ふう、やつと終わつたあ。」

一時間目の授業が終わり、俺は疲れたように机に突つ伏した。一応、調や切歌から教えてもらつていたおかげでわからなかつた所はほぼなかつたものの、こういう専門系の単語だけの授業は色々と覚える事が多いから、元々特筆して頭がいいわけではない俺にとつては、なかなか疲れる授業ではあつた。まあ、横の切歌とかを見ると、アイツはどつちかというと感覚系なのか、そこまで深く理解してる感じは見えなかつたが、教えてくれてた感じからして、たぶん基礎的な事はちゃんと覚えているのだろう。

因みにメタイ話になるが、俺はちゃんと参考書を捨てずにとっている。原作（？）とか言う別の時間軸だと、電話帳と間違えて捨てて千冬姉に怒られたりしての俺がいたりするらしいが、俺は今回調達が参考書を持ってきて、教えてもらひながら覚えたので捨てたりはしていない。また、後々必要な知識も出てくるかもしれないから手元に置いておいた方がいいと言われたので、一応大切に持つてある。まあ、別の世界の俺には同情はする。『必読』と書いてあるとはい、アレが郵送で届いてきてしばらく放置してたら、俺でも電話帳と間違えちゃう自信はある。いや、自信を持つところじゃないが。とにかく、そう思えるぐらい分厚い奴だつたしな。

「一夏、切ちゃん。お疲れ。」

「おく、調。お疲れ。」

「調、お疲れ様なのデス！」

俺が机に突つ伏していると、調が話しかけてきた。さつきの時間は自己紹介の件もあつて話す時間がなかつたが、小中学の頃から、なに

かと話す機会が多いが故に、これが俺たちの学生生活の上の日常みたいなものになつていて。まあ、切つ掛けとしては、名前順でも何かと近くの席になる事が多かつた切歌に調が話しかけに言つて、その隣にいた俺もよく話す機会が多かつたから、結果的にこれがほぼ習慣化して、今のような感じになつていて。最初は切歌にものすごい邪険にされたり、調に無言貫かれたりと色々あつたりしたのも、今となつてはいい思い出だ。

「一夏、授業の方はどう？　私達がある程度教えたから、大丈夫だとは思うけど。」

「ああ。二人のおかげで、何とかついていけてるよ。ホント、色々と教えてくれて助かつたぜ。ありがとな。」

「そんな礼を言われる事じやないデスよ。腐れ縁なのと、千冬さんに頼まれたから教えただけデスし。」

「それでもだよ。たぶん、何も教えてもらつてなかつたら、思いつきり恥かいてた氣もするし。」

「・・・それはそれで見てみたかつたデスね。」  
「切歌、お前なあ・・・。」

「切ちゃん、ダメだよ。それじや、私達の責任問題になつちやつて、織斑先生に怒られるんだから。」

「うう、それはイヤデスね・・・。」

「素直な奴だな、おい。」

とまあ、他愛のない話をしていると、俺達に話しかけてくる生徒がいた。

「・・・ちょっといいか？」

「ん？」

「デース？」

「・・・。」

声のした方を向くと、そこには6年ぶりに見た、俺の幼馴染がいた。

「つ、筠！　久しぶりだな。」

『篠ノ之筠』。

俺の初めての幼馴染にして、俺達の親友。『篠ノ之』の名前でわかる人もいるだろうが、ISの生みの親である束さんこと『篠ノ之束』博士の実の妹でもある。

ISを生み出した束さんの影響で、6年前に『要人保護プログラム』という政府の意向により、筠は俺達の元から離れなくてはいけなくなってしまったので、あれ以来俺達が直接会う事も出来なかつたのだが、さつきの自己紹介でこのIS学園に――しかも同じクラスにいるという事を俺は知つた。本当は話もしようかと思っていたのだが、さつきの時間は休み時間が短かつたのに加え、流石にさつきの授業で疲れていたので昼休みにでも話しかけようかと思つていた。まさか、向こうから話しかけてくるとは思わなかつたが。

「久しぶりデース、筠！」

「久しぶりだね、筠。元気にしてた？」

話しかけてきたのが筠だとわかると、調と切歌もそれぞれ久しぶりと返事をした。筠もそれに応えるように口を開いた。

「ああ、二人も久しぶりだな。でだ。その・・・、廊下で話さないか？  
ちよつと、ここでだと、な？」

「いいデスよ！　調と一夏もいいデスよね？」

「私はいいよ。」

「俺もいいぜ。別に断る理由もないしな。」

筠の提案で、俺達は廊下に移動した。それに釣られてか、視線が廊下側に向いたり、廊下から感じた視線が少しだけ引き気味になつたりしたが、まだ切歌達がいるおかげか、視線に対する耐性はそれな

りに出来てき始めた。まだ慣れはしないけど、この分なら一週間内には放置可能なレベルにまでなるだろう。

廊下につくと、開口一番俺は筈に對して口を開いた。

「ホント、久しぶりだな筈。6年ぶりか？ 元気そうでよかつたぜ。」

「う、うむ。お前の方こそ、息災なようで何よりだ、一夏。調や切歌も、相変わらず変わらないな。」

「デスデース！」

「うん。」

6年ぶりに再会した、幼馴染のメンバー。ここに後、筈が知らない『アイツ』ら二人が合流したら、もっと賑やかになるんだろうけど、調には『アイツ』の事で色々と教えてもらつたしな・・・。何というか、会うのは少し気まずかつたりするんだよな。『アイツ』、元氣にしてるといいけど。

「む？ どうしたのだ、一夏？ 遠くの方を見て。」

「えっ？ いや、何でもない。それより筈、お前去年、剣道の大会で優勝してたよな。遅くなつちまつたけど、優勝おめでとう。」

「なつ!? なぜそれを知つている?!」

俺が『アイツ』の事を思い出して物思いに耽っていたのを筈に指摘され、それを誤魔化す為に、筈に去年の中学での剣道大会で優勝していた事を言うと、筈は顔を赤くして怒り出した。・・・調から『アイツ』の事を聞いて、いろいろ考えてまさかとは思つていたが、筈もなのか・・・まあ、それに関して考えるのは、今はやめよう。『アイツ』にも会う事があれば、いつかは直面する事だが、今は貴重な休み時間。将来の事を考えたりするのは、また今度でいいだろう。

「何でつて、毎日新聞を読んでるからな。因みに、調や切歌も読んでる

らしいぜ。」

「そ、 そうなのか？」

「うん。まあ、私達の場合、世界情勢とかはちゃんと知つておかないと  
いけないって、社長のほうから言われてるのもあるけど、私達自身、社会常識として知つておく必要があるから。」

「それに、新聞を読んでるほうが大人っぽいじゃないデスか！」

「切ちゃんはそういう、雰囲気目当てな気がしなくもないよ。實際、ほとんど私から内容を聞いて理解してる感じがするし。」

「そ、 そんな事はないのデス！ 調、 こういう時だけなんか辛辣デス  
よ。」

「切ちゃんが實際、勉強面がすぐ残念なのは事実だもの。それに、大好きだからこそ、こういう事を言つてるんだよ。切ちゃんがそんな事で馬鹿にされるのなんて、私嫌だもの。」

「し、 調……。」

あれへ、何か二人が自分達の世界に勝手にとんでもいきだしてるんだけど。おかしいな、確か俺達は箒と色々積もる話をするために廊下に出たはずなのに。まあ、正直俺たち3人だけで話しても、ふとしたきっかけで勝手に二人だけの世界へいくから、こうなつたら最低でも調の方が戻つてこないと、どうしようもなくなるんだが……。

「……二人は相変わらずのようだな。」

「まあ、箒がいなくなつてからも、この辺りは大して変わつてないし  
な。というか、むしろ悪化してる気がしないでもない。」

「……こういうのは、そう、いい、のか？」

「さあ？ にしても、百合なんてホント、漫画やアニメの中の話だと思つてたんだがな。」

「じょ、女性が皆こうではないからな！」

「いや、それぐらいわかってるよ！」

その後、二人が百合百合してゐる様子を見（せられ）ながら、俺と箒

もしばらくそのまま色々話していたのだが、千冬姉——織斑先生をたまたま箒が見つけた事で、調と切歌を半ば強制的に現実へと引き戻して、俺達は慌てて教室へと入った。その後の授業も、特に何かあつた訳でもないので、割愛させてもらう。ただ――

「あの『S・O・N・G』所属の二人、すごくいいよね！」

「うん、これは夏コミの執筆がはかどりそう。デュフフ・・・。」

「まさか、うちのクラスにこんな逸材たちがいたとは。これは色々と妄想が止まらないw」

・・・教室に入る時、こんな会話が聞こえた気がしたが、聞こなかつたことにしよう。うん、たぶん、気のせいだ・・・。

調 side

「ちょっとよろしくて?」

「ん?」

「デース?」

「・・・。」

2時間目の授業も無事終わり、私達がまたいつものように話していると、金髪縦ロールの長身の女の子が話しかけてきた。あの子は確かに、『セシリア・オルコット』さんだつたはず。……切ちゃんへ何が、言いに来たのかな？

「まあ、なんですかその返事は！　私に話し掛けられるだけでも光榮なのですから、相応の態度というものがあるのではないかしら？」

「いや、身内で話してて急に初対面の人間が割り込んできたら、多分皆、こんな感じの反応するデスよ？」

「『デース』なんていうのは切ちゃんぐらいだろうけどね。で、いつたいどうしたのオルコットさん？　私たちに何か用でもあるの？」

「ふん、あなたはどうやら私が誰かをちゃんと分かつてるようですね。」

私の返事に機嫌を直したのか、少しだけ自信気な笑みを浮かべ、再び口を開いた。

「まあ、あなたに免じて答えてあげますわ。まあ特にどうでもよいのですが、初めてISを動かした男がどんな人なのかと思つたのと、先程代表候補生の事を『代表候補生』などと面白い間違い方をしてくださつた方の顔を見に来てあげたのですわ。」

「デデデデース！」

「切歌……」

「切ちゃん……。」

「……見ないで。そんな顔で私を見ないでくださいデス！」

切ちゃんはあまりの恥ずかしさに顔を手で覆い隠してしまった。でもね、さつき私はフォローするとは言つたけど、責任は自分でつとめ言つたからね。だから、憐れみを込めた見方をしても大丈夫だと思う。一夏はどちらかというと、呆れの感情もありそだけど。

「あ～、そちらの方はもう、顔が見れただけで十分ですわ。さして興味があつた訳でもないので。」

「それって、どうでもいいっていう事じゃないデスか・・・。脅かさないでくださいよ。」

「相変わらず切り替え早いな、切歌。」

「それが切ちゃんのいいところもあるし。」

「まあ確かに。」

「ちょっと!! 私を無視して話さないでくださいます!?」

私達が自分達の世界で話していると、オルコットさんが無視するなと怒ってきた。・・・この手の人は、ちょっとでも話の輪から外されたと本人が思うと、面倒な怒り方をしてくる。これぐらいなら、まだ我慢出来るレベルだけど。

「ごめんなさい、無視したつもりはなかつたの。ただこれが、私達にとつては日常的なやりとりだつたから。」

「ふん、未だに私と一緒にクラスになれた事の重大さを分かつてないのですか？ イギリスの代表候補生にして、エリートたるこのセシリア・オルコットと、共に学ぶ事が出来るのですよ？」

「・・・・・」

オルコットさんはそういうと、大きな胸をより強調するように胸をはつて尊大な態度をとつた。うーん、同じ代表候補生だから思う事だけど、別に代表候補生だからって、エリートって訳ではないと思う。確かに、国と企業じや採用基準も違うだろうけど、候補はあくまで候補。本当の国家代表、企業代表の方が、よっぽどすごいだと私は思つてゐる。それを、間近でずっと見てきたのだから。

それに、代表候補生といいるクラスがラツキーなのだつたら、一夏はとつもなくラツキーだと思うのだ。だつて、私達といいう『代表候補生』二人と幼馴染な上に、クラスも同じなんだから。

そんな私の内心の思いはともかく、一夏が会話を再開し始めたの

で、こつちも意識を戻さないと。

「オルコットさんも、調達と同じ代表候補生だったのか。じゃあ、どこの企業とかに所属してたりするのか？」

「夏、オルコットさんは私達と違つて、国家に所属している『國家代表候補生』だから、所属はオルコットさんが言つていた通り、イギリスつて事になるよ。」

「なるほど。つて事は、モンドグロッソの時の千冬姉みたいな国家代表の候補つて事か。」

「そう、つまりエリートという事ですわ!!」

何か、バーレンとか派手なSEが付きそうな位、胸をはつて仁王立ちをするオルコットさん。だから、エリートつて別に、そんなに胸はつていう事じやないと思うんだけど……。

そう思つていると、切ちゃんが思わぬ爆弾を放り込んできた。

「まあ、あくまで候補デスから、そこまで威張る事じやないとと思うんでスが。」

「ちよつと、切ちゃん!?」

切ちゃん、流石にここでの発言はKYすぎるよ。せつかく穩便に済まして帰つてもらおうと思つてたのに、色々台無し……。

「・・・何ですつて？」

ほら、オルコットさんも青筋たてて怒つてるし……。ハア、面倒な事になつちやつた。流石にこれは仲裁しないと。

「切ちゃん、オルコットさんを煽らないで。オルコットさんも落ち着いて。ここで喧嘩したつて、何にもならないよ。」

「調、デスが——」

「ジ———。」

「うう……わ、悪かつたデスよ。」

「……あなた、私がこんな侮辱を受けたのに、ここで何もせずに手を引けど仰るんですか？」

「オルコットさん。切ちゃんも、悪氣があつて言つた訳じやないの。だからお願ひ、ここは抑えてくれない？」

「……。」

私が切ちゃんを諫め、オルコットさんに抑えてほしいと言うと、オルコットさんは私を、私達を睨んで少し黙つた。こういうプライドの塊みたいな性格の人が、自分の支柱としているものをバカにされて、ただ黙つて流してくれるなんて事はなきそうだけど、ここで矛を收めてくれると私としても嬉しい。これ以上、無駄な喧嘩はする必要もないだろうし。そう思つてると、時間が来たのか、ちようどいい時にチャイムが鳴つた。それを聞いて、オルコットさんが何か冷めた表情をして口を開いた。

「……興が冷めましたわ。また来ますので、逃げないで下さいね。それと織斑一夏、あなたともまた後でお話させていただく予定なので、そのつもりで。では。」

それだけ言つて、オルコットさんは自分の席へと踵を返した。…先伸ばしみたいな形になつたけど、とりあえず、この場は収める事が出来たかな。よかつた。

私は軽く息を吐き出して、切ちゃん達に「じゃあ、また後で。」とだけ言つて自分の席へと戻つた。ギリギリ千冬さん、織斑先生が入つてくる前に座れたので、怒られる事はなかつた。

ハア、全く何なんですか、アイツ！（#—ω—）

こつちはただ楽しくおしゃべりしていただけなのに、向こうから話しかけてきた挙句あの態度。むしゃくしやするつたらありやしないデスよ！（‘、o、）ノ

えつ、「何が？」、デスか？それはトーゼン、さつきの事デス。何なんデスか、あの金髪ドリル。確かに、オルコットでしたつけ？『国家代表候補生』だか何だか知りませんが、どう言つた所で私達は所詮『候補』。あんなに威張る事じや無い筈デス。調が仲裁してくれたとはいえ、私はまだ納得はできていのデス。もし次来やがつたら、一発ぶちかまして・・・いや、流石にそれはやりすぎデスね。これ以上、調からの説教の罪状を増やすのは勘弁なのデス。だから、出来れば來んな、なのデス。

さて、今私達のクラスは何をしているのかといいますと、3時間目の授業に入った所なのデスが、織斑先生が『クラス代表』を決めないといけないとか言い出して、誰を推薦するかとかいう所なのデス。ちなみに、織斑先生的には『自薦・他薦（漢字は調から教えてもらつたのデス。）は問わず、推薦されたら拒否権はない』だそうなので、とりあえず、矢面に立たされない事だけ祈つておくのデス。そういうのは、どちらかというと調の方が得意デスし。

「で、誰かいるか？」

「はい、織斑くんを推薦します!!」

「私も！」

「私も!!」

「ええ、俺かよ!!」

ほうほう、一夏が推薦されたデスか。まあ、癪ですがアイツ、何か妙にこういうのが得意な気がするんですね。何より優しいうえに、色々気配りもできるから、クラスの皆的にも――、えつ、学園唯一の男だから？　さいデスか・・・。

「織斑、推薦されたものに拒否権はない。先程言つたはずだぞ？」

「（くつ、言う前に先回りされたか。）・・・なら、俺は調を推薦する！  
アーツの方が、こういうのは向いてるし。」

むつ、なるほど。一夏、考えたデスね。確かに、推薦された人が他の人を推薦してはいけないなんて言うのは言つてないですかからね。これでもし複数人の候補が出ても、どうせジヤンケンとかで決めるから、なら知り合いでかつ、こういうのに向いてそうな調に話を振りに行くのは道理デスね。さて、調はどうするつもりデスか？

「なら私は暁さんを推薦します。」

ちよつと調、何考てるデスか!?（；。Д。）

私はそういうのに向かないって、調が一番知つてゐる筈デース！

「切ちやん。」

いつたいどういうつもりデスか？！

何となく?!

{・・・切ちやんうるさい。}

「いや、何となくで巻き込まれたこつちの身にもなつてくださいよ!」

流石にこれには私もびっくりするしかないデスよ。（。Д。；）  
調、流石に考えなしに巻き込まれた側からしたら、これは色々とア  
レデスよ!? いや、『アレといえбаアレ』状態ではある訳デスが。そ  
う思つてみると、調がまた個人間秘匿通信で話しかけてきました。

「それに、ただ巻き込んだわけじゃないよ。こうすれば、もし副代表や代表代理が必要になつた場合、切ちゃんにも任せやすくなるんだから。」

「さ、さいデスか。つてそれ、調がなつた場合だけデスよね？」

「うん。もし一夏や切ちゃんがなる事があつたら、私が副代表や代表代理に着くようにするから。」

「おお、それはありがたいのデス！ 調と二人でなら——」

——大丈夫、と考えていると、急に机をバンッ、と叩く音と同時に誰かが後ろから叫んできたのデス。

「納得いきませんわ!!」

「うわっ、びっくりしたデス!? （△。；）

つて、この声さつきの金髪ドリルじゃないデスか。アイツ、いきなり叫んで何を考えてるんデスか。というか、うちは今クラス代表を決めてる最中とはいえ、他のクラスは授業中デスよ？（―――；）

常識ないんデスか？（―――ノ）

そう考へているのデスが、あのプライドを塊にしたような金髪ドリルの叫びは止まらないみたいで。

「そのような選出、認められません!! 大体、男がクラス代表なんていい恥晒しですか！ 私に、このセシリニア・オルコットにそのような屈辱を、一年間味わえと仰るのでですか!? 実力からいけばこの私がクラス代表になるのは必然。それを物珍しいと言う理由だけで、男子をクラス代表に据えられては困ります！ I S の搭乗経験もろくにない、猿の下になれと!? 私が、わざわざこのような極東の島国に来たのは、I S の技術を学ぶ為に来たのであって、サークスをする気など毛頭ございませんわ！」

とか何とか、ヒステリックに叫んでる後ろのパツ金ドリル（もうめ

んどくさいんでこう呼ぶことにするデス）デスが、大半が自分こそが代表にふさわしくて、一夏はふさわしくないとかいう、無茶苦茶な言いがかり染みたわがままな内容なんデスよね。というか、候補とはいえ国家代表の卵が言つてはいけない単語がわんさか入つてたのデスが、これ指摘した方がいいデスかね？ あつ、調が何か言おうとしてるデスね。なら後は、おつ、一夏が珍しく耐えてるのデス。ここは調に任せた方がいいと判断できるだけの理性は残つてたみたいデスね。流石、『あの人』や先輩、私達と修行してるだけはあるデスね。

「…オルコットさん。ちよつと落ち着かない？ あなた、自分が何を言つてているのかわかつて言つてる？」

「どういう意味ですか？ 私は——」

「…ハア。分かつてないみたいだから言うけど、オルコットさんが言つた事、自分の立場を考えたらわからない？ 『日本』の事を『極東の島国』とか言つたり、『男』である『一夏』に対して『猿』だなんて言つたり。後者はまだ、『女尊男卑』の思考つて事でまだ流されるかもしれない。でも前者なんて、候補生とはいえ国の代表として来てるオルコットさんがそんな事を言つたなんて事が公になつたら、国際問題になるよ？」

「なつ？ ですが、ここは公の場では——」

「ないからといって、言つていい訛じやない。それに、そもそもＩＳを生んだのは日本人の篠ノ之東博士だし、ここにいる織斑先生も元日本の国家代表で日本人。その上、ここはそもそも日本の領土内で作られてる関係上、日本人の生徒や教職員が多い。極論かもしれないけど、オルコットさんの発言はここにいる殆どの生徒達や教職員の人達、そしてＩＳの開発者である篠ノ之博士を侮辱した事になるんだよ？」

「つ！」

調にここまで言われると、パツ金ドリルは顔を青ざめていった。まあ、あのパツ金ドリルは調を相手に口論したのが間違いデスね。私や一夏、篠はおろか、重要な話をしてる時以外の千冬さん、博士（篠

ノ之東博士の事デス)、マム、社長、了子さん、先輩方でも勝てない時がありますからね。的確に相手の否となる部分、正論、具体例等をあげていって、その上で完封してくるので、正直勝てそうにないんですね(？▽?;)

マム曰く、「少し知識を与え過ぎましたかね?」とかなんとか。まあ、小さい頃から勉強が得意で、私の知らない内に色々な知識を蓄えていましたからね。ああいうのを、『スポンジが水を吸うように』つて言うんデスかね。しかも、まだ吸えそうなのが調のすごいところデス(○、▽、○)

やつぱリスゴいデスよ、調は。

おつと、危うく調語りでだいぶ文字数を使っちゃう所だつたのデス。で、話を現実に戻すデスが、ン(――・)?

何か、あのパツ金ドリルの顔がまた赤くなつていくデス。青くなつたり赤くなつたり、忙しいヤツなのデス(??へ?)

「・・・決闘ですわ!! よくも、私に恥をかかせてくれましたわね!!」

・・・ハ?(△。;)

いや、恥をかいたのは自分の発言のせいじゃないデスか(――;)なのになんて、調に八つ当たりしてんデスか。ほら、調も呆れため息ついてますし。

「・・・ハア。そんな無駄な事で、どうして争わなきやいけないの? だいたい、『恥をかかされた』つて言つたけど、それはオルコットさんのせいであつて、私のせいじゃないよね? かかされた、じゃなくて、自分の不用意な発言で恥をかいた、つていう方が正しいよ。それで責任転嫁されて、八つ当たりされても――」

「お黙りなさい!! 衆目の前でこんな晒上げのような真似をされると、私の面子に関わりますわ! それとも何ですか? 『S.O.N.G コーポレーション』の候補生は、他の候補生徒の決闘も受けれないほど臆病者なのですか?」

「「つ!?」

——パツ金ドリルが発したその言葉と同時に、私と調の中の理性は吹つ飛んでしまったのです。

一夏 side

——ジャキン

「ヒイツ?  
「なつ!?

オルコットさんが調に正論を説かれて逆切れし、決闘を申し込んだ時、俺はこの会話の様子がどうなるのかを見守っていた。正直、ここで何か一つでも言い返したかつた気持ちはあつたが、そうした場合話がこじれて、結果的に調達を妙な事に巻き込むかもしれないと思つたから、調が何か話そうとしてるのが見えた俺は、あえて口を噤んで耐える事にした。流石にあの調なら、余程の事がない限りは切れたりしないはずだし、逆ギレして変な方向に話が飛ぼうとしても修正できるだろうと考えての判断だ。

だが、オルコットさんが調達の事を『臆病者』といつた瞬間、俺も一瞬だけ理性が吹つ飛びかけて——、だが普通するはずのない金属音で我に返り、周りを見渡すと、オルコットさんの席の近くには、両手に鎌を持つて、鎌の刃をオルコットさんの首近くに据えてる切歌と、ツインテールを覆うようにしてくつついている機械のアームに付いた大きな鋸状の円盤を、同じくオルコットさんの首近くに設置してある調の姿があつた。

「・・・今、何つつったデス？」

「き、切歌？」

「・・・私達の事を、どう言おうと構わない。でも、あの人達まで侮辱するのなら・・・。」

「調・・・。」

二人が発した声は、今まで聞いたことがない、底冷えしそうなほど低い『怒り』の感情のこもつた声だつた。普段、二人が怒つた声を聞いたことがない訛じやないが、ここまで低い声を出して怒る調達を、俺は見た事がなかつた。

・・・さつきまでの軽い空気でクラス代表を決める雰囲気はもうどこかに消えてしまい、今、教室は重苦しい空気が支配していた。時間にしてそんなに経つてはいないのだろうが、俺達にとつては数十秒は過ぎたように感じた頃に、クラスの担任である千冬姉――、織斑先生が言葉を発した。

「・・・暁。月読。お前達の気持ちも少しば察してやる事はできる。だが、ここＩＳ学園といえど、アリーナ以外で許可なくＩＳを展開する事は原則禁じられている。それは分かつているな？」

「・・・織斑先生。」

「先生、デスけど――」

「反論は許さん。今回は厳重注意で済ましておいてやるが、お前達は今、自らの持つその力で危うく一人の生徒の命を奪う所だつたのだぞ？ それは正しく、月読が言つた通りの外交問題となりうる事実だ。そうなれば当然、お前達の所属する『S・O・N・Gコープレーション』の社会的な立場もなくなりかねない。この意味は分かるな？」

「・・・チツ！」

「・・・。」

二人はそういうと、オルコットさんの首近くにあてていた得物をそれぞれ消して、自分達の席へと戻つていつた。

俺の隣に席がある切歌は、かなり不機嫌そうにドンツと座っていたが。ともかく、このヤバい位重い空気は、少しだけ緩和されたようだつた。

調と切歌が席に着いたのを見届けると、織斑先生は今度はオルコットさんの席の方に視線を向けて口を開いた。

「・・・それでいい。さて、オルコット。自分は見逃されたと思つてゐかもしないが、お前もお前だぞ。一個人ならまだしも、一企業、一国家に対する不遜なまでの言動。当然、これがイギリスに知れれば、お前もただでは済むまい。」

「つ!?

「とはいえ、簡単に初日から才能の芽を摘み取る事は、学園側としても避けたい事だ。だがだからと言つて、暁、月読両名と同じ厳重注意では、二人も納得しないだろう。よつて、お前は今日より3日間、放課後に山田先生による特別補講を1時間受けてもらう。いいな?」

「・・・分かりましたわ。」

「うむ。・・・あと、これは一個人として、そして一夏の姉として言わせてもらうが——」

そう言つて、千冬姉はいつたん目を閉じて深呼吸し、言葉を紡いだ。

「——調子に乗るなよ、小娘。たかが十数年生きて候補生になり、専用機を与えられたぐらいでエリート気取りか? 図に乗るのも大概にしておけよ? 私から見れば、お前も他の奴らも大して変わらん。ISもなければ、そこらにいる学生と何ら変わらんだからな。それを肝に銘じておけ。」

「つ？　・・・はい。」

・・・ヤベエ、めっちゃキレイてる。そりや、こんなに怒ってくれる姉がいるっていうのは嬉しいけど、何もここまで怒らなくてもいいだろう。オルコットさん、めっちゃビビってるし。まあ、あんな怒気をあてられたらしようがないけど。

「うむ、まあ説教はこれぐらいにしておこう。で、クラス代表についてだが、先程オルコットが言つた案は確かに理にかなつてはいる。よつて、この1年1組のクラス代表は、今回自薦・他薦された者達でISによる総当たりの模擬戦を来週行い、そこでの結果で決める事とする。いいな？」

「えつ、ちょっと千冬姉!？」

千冬姉のまさかの提案に、俺は驚きを禁じえなかつた。だつて、いくらなんでも試験の時しかISに触れた事のない素人の俺と、代表候補生の調や切歌、オルコットさんで模擬戦なんかやつたら、俺が完敗するのは目に見えるだろうに――

バンツ

「イツテエ!？」

「・・・織斑先生だ、バカ者。」

「・・・はい。」

『千冬姉』と反射的に言つてしまつた俺に、織斑先生から出席簿の制裁がとんできた。しまつた、さつきので完全に油断してた。・・・今度から気を付けねえと。というか、あれ本当に出席簿か？ 固さが尋常じやなかつたんだが。

「えつ、今織斑くん、織斑先生の事『千冬姉』つて。」

「もしかして、織斑くんって、織斑先生の弟!?」

「ウソ、つて事は織斑くんと結ばれたたら『玉の輿』つて事!?」

俺が織斑先生の事を『千冬姉』と呼んだ事で、またもやクラスの雰囲気に活気が戻つてき始めた・・・が、クラスの皆、気づいてなかつたのかよ。自分で言うのもなんだけど、『織斑』なんて苗字、そんそうないだろう? 知つてるものだとばかり思つてたんだが。あと一人妙な事を言つてた子がいるけど、別に俺と結ばれたからと言つて『玉の輿』になる訳じやないぞ。

「なら、今のうちに縁を結んでおけば!」

「こら、アプローチをするのは私が先よ!!」

「いや、私が先に――」

「静かにせんか!! ここはともかく、他のクラスは授業中だ!!」

クラスの騒ぎようが(妙な方向に)どんどん上昇し始めた時、織斑先生のありがたい一喝が入つた。その声でさつと黙るクラスメイト達。まだ初日なのに、すごい連携力だな。というか、調は大丈夫――つて、耳をふさいで何とか対処してるか。よかつた、それぐらいまでは落ち着いてたか。

クラスが黙つたのを確認した織斑先生は、また教壇まで戻つて話を再開した。

「・・・さて、話を戻すが。織斑、お前はおそらく、代表候補生である暁、月読、オルコットの3名と自分を比べた所で、勝てる見込みはないと考えているのだろう。持ちうる情報内で、彼我の戦力差を冷静に把握できているのは評価してやるが、それがこれらの模擬戦での勝利を諦める事にはなるまい。どういう理由であれ、お前に期待してくれるクラスメイトもいるのだからな。」

「・・・はい。」

まあ、確かに千冬姉、織斑先生の言つてる事は分かる。力の差があると分かつてゐるからと言つて、それで諦めていいのか・・・。答えは『否』だ。いくら考へても敵わないからと諦めてたら、敵う日なんていつまで経つても来ない。諦めずに、勝とうとする意志こそが重要なんだって、『あの人』ならそういうはずだ。

それに、確かに俺が『世界初の男性 I-S 操縦者』で珍しいから、つていう理由で俺を推薦してゐる人達もいるだろうけど、もしかしたら、本当にただ純粹に俺に任せようと思つてゐる人もいるかも知れない。俺が諦めるつて事は、そんな人達の思いも踏みにじつてしまふ事になる。それはたぶん、俺自身が目指してゐるものを見定する事になる。そんな事を、俺自身が許しちゃいけないんだ。

・・・なんだ、考えてみたら、『勝てない』なんて決めつける理由はないじゃないか。無様に負けるかもしれないとしても、きっと、諦めない事にこそ意味があるのであるのだから。それに、これはあくまで模擬戦なんだ。俺がいつも、『あの人達』とやつてゐる修行と同じ、じやないかもしれないけど、胸を借りる気持ちで挑めばいいんだ。

「・・・フツ、初めからそうしていろ、バカ者ガ。」

俺の顔を見ながら、織斑先生が少しだけ笑つてそう言つた。まさか、今のは俺を勇気づけるためだったのか？ 相変わらず不器用といふかなんというか。まあ、もうかれこれ 10 年以上一緒に暮らしてきた姉からの激励なのだ。無駄にするわけにはいかないよな。

俺がそう思いなおしていると、織斑先生が少し考へてから口を開いた。

「・・・ふむ、これはお前に伝えるのはもう少し後にする予定だつたのだが。まあ、この場で伝えてもかまわぬか。」

「？」

「織斑、お前には初の男性 I-S 操縦者という事で、試作機的なものだが専用機が与えられる事になつてゐる。」

「なつ、俺に専用機が!?

「つ!?

「デース!?

「えつ、織斑くん専用機もらえるの?!」

「うそ、まだ1年生で代表候補生でもないのに!?

「羨ましいなあ。」

俺が専用機を与えられる事になつてゐる事を織斑先生が話し、クラス中から驚きの声、もしくは羨ましいという声が上がつてゐた。かくいう俺も驚いていて、横の切歌も驚いてゐる事から、おそらく調も驚いてると思う。二人が知らない事を見るに、織斑先生、そして教師陣、学園側しか知らない事情なのだろう。それにしても、『モルモット的な何かの実験に付き合わされるかもしだれない』と調から聞いてはいたが、まさか専用機が与えられる事になるとは。

因みに、皆が驚いたり羨ましがつてるのには理由がある。それは、『ISが世界で467機しかない』ためだ。その理由は、ISの核となる『ISコア』が開発者で、筈の姉である束さんが製造法を『極秘』にしてしまつてゐるため、束さん以外作る事が出来ず、さらに束さん本人が『467個目のISコア』を作つた後、それ以上の『ISコア』を作らないと言つて行方をくらませてしまつたため、現状、世界中に存在するISは『ISコア』の数と同じ『467機』しか存在しない。そして、そのISコア自体は各国で平等になるように分けられてしまつたため、必然的に1国や1企業が持つISコアの数は非常に少なくなる。その貴重な数のISコアを使つてISが作り出される事を考えれば、専用機を与えられる事がどれだけ重要な事になるのはお分かりいただけるだけだろう。

「因みに、製作しているのは暁、月読が所属している『S.O.N.G コーポレーション』だ。ただ、あそここの所持してゐる第三世代IS、『シンフォギアシリーズ』とはまた別での製作という事で、開発に少し時間がかかるらしい。が、お前にとつても、無関係な企業といきなり組

まさるよりはまだ気が楽だろう?」

『S・O・N・G コーポレーション』が・・・。」

しかも、まさか調達が所属している企業で、俺の専用機の開発が進められているとは。千冬姉——、織斑先生のあの口ぶりからして、おそらく俺の専用機を製作するという事が決まってすぐに、『あの人』に頼んだんだろう。確か『あの人』、あそこの重要な役職についてるつて、『兄(というか姉?)弟子の人』が言つてたし。そう考えると、調達が所属している企業という事以外にも俺、『S・O・N・G コーポレーション』と関係があるんだな。

それにしても、開発が遅れてるつて、どれくらいなんだ? 間に合うよな? ···· 仮に間に合わなくても、たぶん訓練機で模擬戦はすることになるだろうけど、一応、確認はしておかないと。

「···分かりました。で、その専用機は、来週には間に合うんですか?」

「まあ、当然の反応だな。間に合うとは先方から聞いてはいるが、もしかしたら、ぶつつけ本番の可能性もある。そこは留意しておけ。」

ぶつつけ本番の可能性あり、かあ。···これはまたハードだな。でも、そうだとしてもやるしかないんだよな。

だつたら、それまではやれる事を全力でやるしかない!

「···はい!」

「フツ、いい返事だ。さて、ずいぶんと話が長くなつてしまつたが、授業を再開する。巻きでやるから必ずついてこい。いいな?」

織斑先生が俺の返事を聞いてまた少しだけ笑みを浮かべると、いつもの凛とした表情にすぐ戻り、授業を再開した。そういえば、クラス代表云々の話してたけど、今は授業中なんだよな。···おいていかれないように、授業にちゃんとついていかないと。出来る事を全力

で。それが、今俺にできる最大限の事なんだから。

to be continued:

### 第3話：昼休み、部屋割り、そして――

調 side

「ハア～、なんか初日からドツと疲れたデスよ。」

「・・・そうだね。」

3時間目のクラス代表決めの時に色々あつたものの、午前中の授業は滞りなく終わって、今は昼休み。

私は、2度にわたるクラスメイトの騒ぎようで多少の疲労と少しの耳痛を感じてはいるが、切ちゃんも同じく相応の疲労がたまってるみたいだ。といつても、切ちゃんの場合は主に、その3時間目のオルコットさんとの一件が原因だろうけど。普段は色々と残念な切ちゃんだけど、内心では色々考えててくれるから、精神面では結構疲れやすかつたりするのだ。切ちゃんは「調の方がもつと疲れてるデス。」なんて言うけれど、正直私は精神面より、肉体面での疲労の方が表に出やすいせいか、切ちゃん程そこまで精神的に疲れたと思つた事はない。内心では全く考へてない、という訳ではないので、おそらく切ちゃんよりも精神的には図太いのかもしれない。でも時々、切ちゃんぐらい身体が丈夫だつたらなど考へる事もあるので、私達は足りない部分を互いに補い合える存在なのだと思う。

「二人とも、お待たせ。」

「待たせてすまないな、切歌、調。」

「もう～、遅いデスよ二人とも！」

「すまない。一夏が決めるのに時間がかかつてな。」

「いや、悪い。ここの中食、結構うまそうなの多かつたからさ。」

そう考へていると、一夏と篠が学食を買って、私達の近くに座つてきた。私達は最初、お弁当を持参していたので教室で食べようかと考えていたのだけど、一夏が篠を誘つて学食に行くといい、それを済る

箒を説得する（ように一夏にこつそり頼まれた）ために、一緒に食堂に来ている。まあ、頼んだ本人がメニューを決めるのに一番時間がかかるつたみたいで、そのせいで切ちゃんが文句を言つてるけど。

それにして、おいしそうなメニューが多そうな気はしたけど、一夏が迷うほどなんだね。一夏って結構、年寄りくさい所あるから。どんな時でもご飯の品目とかはきつちりしてるし、偏った食事は絶対作らないし、食事中の姿勢とかもしつかりしてるし。最後のはまだ分かるとしても、最初と二つ目はすごく細かいので、マムが今でも少し苦手意識を持っているぐらい（マムはお肉好きの偏食家のため）。とはい、あれはマムが悪い。年齢的にもかなり年なんだから、いい加減お肉以外もちゃんと食べて、自分の体を労わつて欲しいとは思う。私や切ちゃんが言つても、なかなか聞いてくれないけど。

「で、結局焼き鮭定食にしたんだ。」

「ああ。」

「・・・見た感じ、日本の食卓を紹介する奴とかで、普通に見る品目ですね。」

「でも、バランスが取れてていいだろ？」

「・・・まあ、そうなんデスかね？」

「そういうえば、二人は弁当なんだな。ナスター・シャさんが作ったのか？」

「ううん、自分達で作つたよ。マムももう、いい歳だし。」

「それにマムに作らせたら、肉だらけになり兼ねないデス。」

そう言つて私達は、互いの弁当をあけた。一夏ほど上手ではないけれど、私も料理に関してはそれなりに自信があるし、最近は『マリア』もなかなかないから、うちのおさんどんはだいたい私が担当してる。切ちゃんもできるにはできるけど・・・まあ、うん。あまりこう言いたくはないけど、雑なんだよね。すりつぶしただけのジャガイモ（俗にいう『マッシュポテト』）とかいうのが出てきたこともあつたし、しかも時たま作ろうとして失敗する事があるから、その時は大変

だつたりする。流石に、漫画でよく見る調味料のミスは、今のところした事はなかつたはずだけど。

「まあ、私はそれでも——」

「ジ——ーーー。」

「うう、わかつてるデスよ調。野菜もちゃんと食べるデスつて。」

「よろしい。」

今この会話で察した人もいるだろうけど、ママ同様切ちゃんとお肉が大好き。それは別に良いんだけど、野菜も時々ちゃんと食べてほしいと思う事があるのだ。一夏みたいに品目全部そろえて食べろとは厳しく言つたりしないけど、せめて『嫌いだから、苦手だから食べない』というのはなるべくやめてほしい。食べなかつたら、せつかく作った料理がもつたいないし、何より食べなかつた分栄養価が減る事になるのだから。

そう考へていて、筈が苦笑しながらこう言つてきた。

「調、お前一夏に何か言られたのか？」

「特に何も言われてないよ。ただ、中学の頃に『ちゃんと食べないと身長が伸びない』って、『マリア』に言られたのを覚えていたから。でも、マリアが一夏から少し影響を受けてる面もあるから、間接的に影響を受けたことにはなるかも。」

「そ、そ、うか……。それにしても、あの人も一夏の影響を受けていたのか。」

「うん。いつ頃影響を受けだしたのかは、正確には分からぬけど。でも、元々優しくて母親みたいな性格だつたから、影響を受けるのは必然だつたのかもしれない。」

「なるほど。でも、そんな人が今では『アイドル大統領』なんて呼ばれているのだから、世間は分からぬものだな。」

「うん。」

箒とそんな話をしながら、私はふと、今もどこかの空の下で歌つて、いる『マリア』の事を思い浮かべていた。私や孤児院の皆にとつては、『お姉さん』のような存在、というより、ママよりも『お母さん』のような感じがする人で、今は世界を舞台に活躍するトップアーティストでもある。その高飛車な感じの喋り方やステージ上での尊大な印象も相まって、『アイドル大統領』なんてあだ名がついてるけど、本性はすごく優しい母親のような人で、ステージ上のあれば妹の『セレナ』曰く、『キャラを作つて、弱気で引っ込み思案な自分を鼓舞している』のだそうだ。正直、そんなことしなくてもいい気がしなくもないけど、芸能界というところは『マリア』曰く、『一筋縄ではいかない世界』だそうなので、そのキャラ作りも芸能界を渡り歩く上で『処世術』のようなものなのだろう。

そんな事を考えていると、はつらつとした元気な声が耳に届いてきた。

「調ちゃん!! 切歌ちゃん!! 一夏君!!」

声のした方を向くと、そこには茶髪に左右対称の「N」の形をした髪留めをつけてる人と、その人の後ろに黒髪を白いリボンでポニーテールにしている人、それに薄紫色の長い髪を赤いリボンで括つてる人がいた。3人とも、制服の胸元のリボンの色が私達と違い、茶髪の人と黒髪ポニーの人が黄色、薄紫髪の人が赤色だったので、それぞれ2年生と3年生の人だとすぐにわかつたが、それ以上に私達は、その人達とこの学園に来る前から面識があつた。いや、面識があつたどころか、彼女達とは『S・O・N・Gコーポレーション』ではなく何度も顔を合わせ、最近は任務で一緒に行動する事もあり、お互いの事はよく知つていてるぐらいだ。その3人——私達の所属する『S・O・N・Gコーポレーション』での先輩達の姿を捉えた私は、少しだけ会釈して応えた。

「響さん、未来さん、それにクリス先輩も。ここにちは。」

「響さん、お久しぶりです!! 未来さんに雪音先輩も!!」

「先輩方、こんにちはデース!!」

「おう、久しぶりだな。」

「皆、元気そうでよかつた。」

「うんうん、元気なのはいい事だよ!!」

「お前は元気過ぎだがな。」

「う、つ! ク里斯ちゃんは相変わらず辛辣だなあ。」

茶髪の人が薄紫髪の人にそう返しながら、3人は私達の隣の席に座つた。

この3人は、さつき言つた通り『S・O・N・Gコードポレーション』での私達の先輩で、茶髪の人が『立花響』さん、黒髪の人が『小日向未来』さん、薄紫髪の人が『雪音クリス』さんで、3人とも私達と同じく『S・O・N・Gコードポレーション』の企業代表候補生となつている。

響さんは『シンフォギアシリーズ』の3号機『ガングニール』を響さん用にチューニングし直した『ガングニール Type-H』の装者なのだが、私や切ちゃんとは違つて、孤児院出身という訳ではない。元々は私達の先輩の一人に憧れてIS学園に入学して、そして響さんの親が『S・O・N・Gコードポレーション』に務めていたのもあって社の見学に来た際、偶然にもマリア用に開発し、ロールアウトしたてだつた2代目ガングニールを動かしてしまい、うちの企業代表候補生となつたという、少し変わつた経緯があるのだ。

そして未来さんは、そんな響さんについてくる形でIS学園に入学して、その後響さんが『S・O・N・Gコードポレーション』の企業代表候補生になる時に入社、そして糺余曲折あつて、その時開発中だった『シンフォギアシリーズ』の7号機『神獣鏡』（シンエンドショウウジン）の装者となる事で、『S・O・N・Gコードポレーション』の企業代表候補生となつたそだ。ちなみに、『神獣鏡』に関しては今年に入つてようやく完成したらしく、そのため私達『S・O・N・Gコードポレーション』の企業代表候補生の中では一番専用機の搭乗時間が短かつたりする。

クリスさんは、私たちと同じ孤児院出身で、『シンフォギアシリーズ』の2号機『イチイバル』の装着者でもある。乱暴な言い方や独特的の言語センスで話すのが特徴だけど、根はやさしくて、とても頼りになる先輩である。ただ、時々先輩らしく振舞おうとして、空回りしたりすることもあるけど、いい先輩であるのは間違いないと思う。

「3人とも、改めて入学おめでとう!!」

「ありがとうございます。」

「デスマース!!」

先輩達3人が隣の席に着くと、一番近くにいた響さんがそう言つてきたので、私と切ちゃんも、改めてお礼を言つた（切ちゃんのは…、うん、たぶんお礼だと思う）。まあ、私と切ちゃんは、入学が決まった時に『S・O・N・G コーポレーション』でお祝いされたりしたけど、一夏も含めてだと、こうやつておめでとうと言われるのは初めてだ。言われた一夏も、少しばにかみながらもお礼を返していた。

「いえ、まあ、色々ありましたけどね。でも、ありがとうございます。こちらこそ、これからよろしくお願ひします。」

「うんうん！ こつちこそ、よろしくね！ それにしても一夏君、入学早々調ちやんや切歌ちやん以外の女子を侍らせてるなんて、隅に置けませぬなあ。」

「か、からかわないでくださいよ！」

「そ、そうだ!! だいたいあなた、調達とは知り合いみたいだが、一夏とどういう関係なんですか!?」

響さんが一夏の隣に座つていた筈を彼女か何かと思つたらしくからかうと、一夏は顔を少し赤らめて怒り、筈も筈で初対面ながら、私と切ちゃんが先輩と言つていたから敬語はつけてるもの、顔を赤らめながら怒つて、一夏と響さんの関係を問い合わせていた。それを聞いた響さんはとくに――

「ん~、私と一夏君の関係があ。ん~、まあ強いていうなら、同じ師匠の下で血の滲むような特訓を積み重ね、切磋琢磨しあつた、姉弟子と弟弟子、かな?」

「何!? 一夏、本当なのか!?

「ま、まあ間違つちやいないかな。実は、色々あつて響さんの師匠、『風鳴弦十郎』さんに鍛えてもらつてさ。」

「そ、そうだつたのか・・・。しかし、特訓といつても何の特訓をしていたんだ? 剣なら、私達でなくとも千冬さんが教えてくれただろうし、中学では剣道部等もあつただろう?」

「まあそうなんだけど、弦十郎さんに鍛えてもらつたのは、もう色々としか言えないかな。肉体的にも、精神的にもしごかれたり。」

「・・・すまん、言つている事は何となくわかるが。」

「あ~、じゃあ今度、篝も一緒に参加してみるか? そしたらたぶん、分かると思うし。」

「ふむ・・・。まあ確かに、一夏がどのような特訓を積み重ねてきたのかは気になるな。では、都合があれば参加させてもらつてもかまわないか?」

「ああ。響さんも構わないですよね?」

「うん。いや~、こうやって切磋琢磨する仲間が増える・・・。青春ですなあ。」

「響、なんか爺臭いよ、その言い方。」

「爺臭いはひどくないかな、未来!?」

未来さんのツッコミにショックを受ける響さん。でも、確かに何となく言い回しが年寄りみたいだなとは私も思った。響さん、ああやつてたまに年寄りみたいな発言をしたり、親父臭くなつたりするから。だけど、ショックを受けてもガツチリと引っ付いてる笑いあつてるあたり、これが二人の間で普段から交わされてる会話なのだろう。ただ、横のクリス先輩はちょっと呆れが混じつた視線を向けてるけど。

「つたく、相変わらず熱い奴らだな・・・。そういう事は家でやれよ。いや、この場合寮の自室か？まあ、それはともかくとして、久しぶりだな、箒。」

「お久しぶりです、えつと、クリスさんですよね？」

「おう、覚えてくれてたか。かなり短い期間だったから、忘れられててもしようがねえつと思つてたが。」

「話し方や髪の色が特徴的なので、すぐ思い出しましたよ。」

二人がこう話すのには理由がある。まず、私と切ちゃんは一夏と箒、それと千冬さんは、何かと一夏と千冬さんが私達の孤児院によく来ていたので、一緒にいた私達はもちろん、施設内では保護者のような立場だつたマムと、千冬さんの一つ下で当時後輩だつた『マリア』は、なにかと会う事が多かつた。だけど、クリス先輩はその頃、あまり人と関わろうとせず塞ぎ込んでいたので、一夏達と会う機会が極端に少なかつたのだ。まあ、さすがに見かねた『マリア』や『セレナ』、マム達のおかげもあって、少しだけ心を開いてくれたけど、その時は、私たちはもう3年から4年へと上がり、『I・S』の存在も表舞台に出た後だつた。つまり、箒が『要人保護プログラム』で各地を転々とする事になるまで、もうそんなに時間がなかつたため、二人の接していた時間は少なかつたという事だ。

ただ、箒も言うように、その頃からこういう『男勝り』、といえればいいのかな？とにかく、話し方が少し雑な印象を受ける話し方をしていたし、あの孤児院を見ても、クリス先輩のような髪の色はいなかつたはずなので、箒の印象によく残つてたんだと思う。

「およよ、クリスちゃんも箒ちゃんと知り合いなの？」

「ん、まあな。私たち『S・O・N・G』傘下の孤児院出身つてのは前に話しただろう？ その時にな。」

「そうだつたんだ。つて事は、5人は幼馴染つて事？」

「まあ、そなりますね。」

「そつかあ。おつと、そいえばだいぶ遅くなつちやつたけど、自己紹

介するね！ 私は立花響!! 9月13日生まれの16歳O型で、身長はこの前『S・O・N・G』での測定で157センチ。体重は・・・フフツ、もう少し仲良くなつたら教えてあげるね。で、彼氏いない暦は年齢と同じで趣味は人助け。好きなものは『ご飯＆ご飯！ よろしくね、筍ちゃん！ で、こつちが――』

「――響の幼馴染で、親友の小日向未来です。よろしくね。」「えつ、あつ、はい。こちらこそ。篠ノ之筍です。よろしくお願ひします。」

(おそらく)響さんの自己紹介に戸惑いはしたもの、筍も自分の自己紹介を返していた。すると、まあ予想通りと言うべきか、響さんが筍の名字に食いついてきた。

「ん、『篠ノ之』って事は、もしかして筍ちゃん、東さんの妹さん？」  
「つ!？」

筍の事を『東さんの妹』と響さんが聞くと、筍は露骨に嫌な顔をして顔を背けた。事情を知ってる私達はある程度わかってる為、特に気にしなかつたものの、その辺を知らない響さん達は怪訝な表情になつたため、響さん達の近くに座っていた私と切ちやんで事情を小声で説明する事にした。

「・・・すみません。筍、実は東さんとあまり仲がよくないんです。」「えつ、そうなの？」

「優秀な姉と比べても、自分が勝つてると思えるのは剣道だけ、と思つてはいますけど、実際のところ、なんでもそつなく完璧以上にこなせちゃう東さんに対し、劣等感を抱いてるみたいなのデス。おまけに、あの人のせいで家族がバラバラになつたつて考えたら・・・」「・・・なるほどな。まあ、家族とバラバラにされたとなりや、たとえ姉だらうが恨みたくもなるよな。」「そうだつたんだ・・・。」

「・・・私、ちょっと、無神経だつたかな。」

「響さんは事情を知らなかつたので、仕方ないと私は思いますよ。」

簡単な事情を説明すると、未来さんとクリス先輩はそれぞれ納得してくれて、響さんは自分の発言に対しても少し無神経だつたかもと反省していた。まあ、響さんは事情を知らなかつたので、それに関しては仕方ないと私は思う。流石に会つたばかりだし、何より響さん（と未来さん）には兄弟や姉妹がいながら、そういう比較対象が周りにいないといなかつたというのも理由の一つとして考えられる。余談だけど、クリス先輩をカウンントに入れなかつたのは、私達や孤児院の皆とある意味兄弟姉妹みたいな関係だつたし、心を開いてからは何かと面倒を（どこかぶつきらぼうながらも）見てくれる頼りがいのあるお姉さんつて感じだつたから、つてところかな。

あと、3人には説明していないが、篠が東さんに對して怒つてるのは、家族と引き離されただけでなく、一夏とも引き離されたのも、東さんとの間に壁が出来てる理由の一つだとは思う。こつちはあくまで推測だし確証はないけど、それでも篠が一夏の事を好きだと考えるど、あながち間違いではないと思う。・・・これを言うとまた、響さんが大きく反応しそうだったので、言うのは憚られたけど。

「ごめんね、篠ちゃん。無神経な事言っちゃつて。」

「・・・いえ、気にしないで下さい。ただ、私があの人の妹だととしても、あの人とは違うので。」

「分かつた。」

「（実の姉を「あの人」呼びか・・・。こりや重症だな。）・・・とりあえず、辛氣臭え話はこれぐらいにして、だ。」

響さんが篠に殺氣の発言について謝つていると、突然クリス先輩が私達の方を見てこう言つてきた。

「お前ら、来週イギリスの代表候補のヤツとやり合うんだつて？」

「デデデデース!？」

「つ、どうしてそれを!?」

「いや、さつきたまたま廊下で1年生共が噂しててさ。『来週織斑一夏とS.O.N.Gコー。ボレーションの代表候補生とイギリスの代表候補生が、クラス代表をかけて決闘する』っていうのが。」

クリス先輩から知っている理由を聞いて、私は自分のクラスメイトの口の軽さを呪いたくなつた。まずい、もしこんな事になつた理由を洗いざらい吐くことになつたら、説教で済むかどうか……。そう考えているとクリス先輩が、普段の先輩からは意外な事を言つてきた。

「まあ、詳しい事情は聞かねえよ。お前らもまだ入学したてで、色々はつちやけたくなる事もあるだろうしな。」「えつ?」

「デース?」

クリス先輩が言つた事に、私達は一瞬耳を疑つた。失礼かもしけないけど、クリス先輩は割と、後輩に対して厳しい感じの印象があつたのだ。特に、間近で色々と響さんに対して怒る事も日常茶飯事だつたので、学校でも結構こんな感じなのではと、私達は想像していたのだ。そんな、意外そうなものを見た私達の表情を見てか、クリス先輩が怪訝な顔をして口を開いた。

「・・・ンだよ、その顔は。」

「いや、だつて——」

「クリス先輩、割とそういう、自分が面倒な事をしなきやいけない事つて、嫌いじやないかと思つてデスね・・・。」

「切ちゃん、流石にそれは失礼じや・・・。」

「あのなあ、これでも私は先輩だぞ。後輩の面倒も見れないで、先輩風吹かせられるかつてんだ。」

「クリス先輩・・・。」

「それにな、後輩つづーのは先輩に面倒をかけるもんだろ？ そこのいやすこ（※1）バカはともかく、お前らがかける迷惑くらいなら、かわいいもんさ。」

そう言つて、クリス先輩は優しくも頼もしい笑みを私達に向けてきた。その顔は、言外に『何かあつたら私を頼れよ』と、私達に伝えている気がしたので、私は短く、「はい。」とだけ答えた。

その後は軽い談笑をしながら昼食をとつて、それからそれぞれの教室へと戻つていった。

（※1）いやすこ＝食いしん坊の事。この時、私達が話している裏で、響さんが食い意地をはつたようにいっぱい食べていたので、その事からこう言つたんだと思うよ、切ちゃん。

「さ、さいデスか。急な解説、ご苦労様なのデス。」

---

s i d e 切歌

「あつ、良かつた。3人とも、まだ教室にいましたか。」

夕日が教室へと差し込んだ放課後。

一夏と私達がそろそろ自分達の寮や家に帰ろうと思つたら、山ちゃん先生（教室内のクラスメイトの間で広まつた、山田先生のあだ名デース）が織斑先生と一緒に入ってきたのデス。いつたい何デスかね（・ー・？）

「山田先生。それに織斑先生まで。」

「どうしたデスか、急に？」

「暁と月読、それと別件で織斑に連絡があつてな。しかし、3人とも揃っていたのは好都合だ。探す手間が省けた。」

このタイミングで私達に連絡、デスか（———）？  
まあ何でもいいデスけど、一夏と私達で違う連絡つて何デスかね  
(ー・ω・ー)？

「まず、暁と月読だが、すまん。月読には部屋を移動してもらう事になつた。」

「何デスと!?!?」

「そんな、どうして!?!?」

織斑先生からの急な寮の部屋移動の連絡に、私と調は驚愕の声をあげざるを得なかつたのデス。というか、流石に急すぎるデスよ！Σ  
(? □ ? ; )

だいたい、入学前に私達生徒の寮の部屋は決まつていたはずデス。  
それが何で急に――

「すまん、政府から急遽、織斑を寮に入れろという指示が来てな。慌てて調整した結果、悪いが月読には部屋を移動してもらう事となつた。」「そんな・・・。」

理由を聞いた調は、みるみる内にショボンとなつていきました。  
元々調も私も、学校行事の修学旅行等で旅館に泊まる時を除いて、だいたい一緒の部屋にいる事が当たり前だったので、2人部屋等の個室で離れる事つてなかつたんデスよね。私としても、調と離れるのは嫌デスけど、・・・もう決まつちやつたものは仕方ないのデス。

「調、決まつちやつたものはしようがないデスよ。別に、今世の別れつて訳じやないんデスから。」

「…………」

私が心配しないでと言うと、調が無言になつて、つて調、そんな真顔になつてどうしたデスか（・・ω・・）？

「……切ちゃん。」

「ふえ、何デスか？」

「……了子さんとちやんと連絡、取り合える？ それも新しい部屋の相手に内密で。」

「う、つ!? そ、それは……。」

調からの質問に、思わずたじろぐ私。確かに、了子に定期的に連絡を入れなきやいけないなあと思つてはいましたが、あれは調と一緒の部屋だつたから特に気にしなくて良かつただけで、調と別々の部屋となると……、うん、上手くいきそうな案が即興で浮かばないのデス。調はポーカーフェイスが上手いのでその辺心配ないデスけど。

あく、了子さんと言うのは、私達の持つ専用機を作つた人で、社長さんの恋仲の『櫻井了子』さんの事デス。『S. O. N. G コードレーシヨン』の技術主任も担当していくて、私達の持つ『シンフォギアシリーズ』の基本設計を担当したのも了子さんなのデス。まあ、少し変わつた人ではありますが（――ω――）

なので、私達にとつては『相棒の生みの親』つて感じなのデス。で、私達、実は入学前に「定期的に連絡をちようだい。」とその了子さんに言つれておりましてデスね。その連絡用として、持ち物にノートパソコンが含まれてて、それでやり取りする心算だつたのデスが、調が同じ部屋でない以上、うつかり何か喋つちやつた時に面倒な事になりかねないデスし（――ω――；）

と、色々考えていると、織斑先生から意外な助け船が出されたのデス。

「あ～、その点についてなら大丈夫だと思うぞ。」

「ふえ？」

「織斑先生、それはどういう——」

「実は、櫻井教授から、『相部屋は極力、身内内に留めてくれ』との連絡があつたんですよ。」

「了子さんから、デスか？」

「ああ。・・・本来、あまりこういうのは褒められた事ではないのだろうが、お前達の場合は事情が事情だ。NGOとしての側面も持つ『S.O.N.G』の活動で、学園から離れなければいけない事態も発生する事を考慮して、極力お前達の知り合いか、もしくはその辺りの事情を酌量してくれそうで、かつ信頼のおける者と相部屋にするようにはした。」

「つまり、定期連絡に関しては気を使わなくていい、と？」

「そういう事だ。」

織斑先生の説明で私も調もようやく納得が言つたのデス。これら、調と部屋が離れちゃう所を除けば、私も気楽に部屋替えを受け入れられるのデス。

その後、私達3人は鍵を受け取つて、それぞれの寮の部屋へと向かっていきました。・・・何か、鍵を受け取つた時に調と一夏の顔が変な感じになつてたのはちよつと気になるデスけど。

あと余談デスけど、一夏の荷物は千冬さんが必要最低限だけまとめて部屋の方に持つていつたらしいのデス。といつても、内容だけ聞いたら着替えと携帯充電器だけと、割と簡素だったデスが。流石の一夏も、これには「解せぬ。」と、千冬さんのいない所でボソツと言つていましたが・・・アレ、地獄耳とかで聞かれてませんよね？（；；ω・）

とまあ、気軽にここまで話言つていたのデスが、この翌日、あのトーヘンボクを真つ二つにしてやりたくなるとは、この時はツユほども思つてなかつたのデス。

S  
i  
d  
e  
調

「じゃあ、アタシの部屋はここなので、お先に失礼するデース！」  
「うん。切ちゃん、また明日ね。あつ、了子さんにもちやんと連絡、忘  
れないように。」

「わかつてゐテスよ！」

切ちゃんはそう言つて、鍵を開けて自分の寮の部屋へ入つていった。それからは無言で一夏と部屋へ向かい、その部屋の前についた所で、ここに来るまで無言を貫いていた一夏が口を開いた。

「・・・ついたな。」

「うん、ついたね。」

二  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
八  
ア  
《  
《  
《  
《  
。

どちらからともなく、溜め息をついた。  
いやまあ、確かに知り合いにするとは聞いてたけど——

「――・・その『知り合い』に同じ部屋の鍵を同時に渡すって、どういう事なの？　しかも、何の説明もなく。」

そう、私と一夏が先生達から鍵を受け取ると、その部屋の番号と同じだったのだ。まあ、この学園内で学年が同じ知り合いとなると、一夏か等ぐらいしかいないから、薄々そんな気はしてたけど。

それにして、この組み合わせがもし切ちゃんにバレた場合、一夏の身が色々と危ないかもしれない。切ちゃん、こういう事に關しては色々と早とちりしがちだから、いきなり『マストダイ』とか言いながら、一夏に切りかかりかねない。一夏もそう思つてはいるからか、微妙な表情をして言葉を返した。

「まあ、あの場で説明してたらしてたで、切歌に俺が殺されそุดけど。」

「流石に、先生達の前ではしないと思うけど。でも正直、否定は出来ないかも。」

「だよなあ。・・・せめて、バレるのは専用機が届いてからがいいな。」「それまでに、情報が漏れなきやいいけどね。」

「だな。」

そんな会話をしながら、私が鍵を開けて、二人で部屋に入る。部屋には既にそれぞれの荷物が運び込まれており、段ボール箱がいくつか置いてあつた。といつても、一夏も私も、そこまで私物が多い方ではない（一夏の場合は千冬さんが持ってきたのが少ないのもあるけど）ので、荷ほどきや中身の確認なども然程時間はかからなかつた。

「調、荷ほどき終わつたか？」

「うん、終わつたよ。」

「早いな。何持つてきたんだ？」

「ヨーヨーとローラースケート、それとノートPC。あとは一夏と同じ感じかな。」

「へえ、意外と少ないんだな。」

「元々、私はそんなに私物も多くないしね。身だしなみは最低限整えてるけど、別段オシャレが好きとかいう訳じやないから。」

「そうなのか。あつ、そういうえば調。シャワーとかの順番はどうするんだ？」

荷ほどきを終えて、服などを纏めていると、一夏がそう聞いてきた。そういえば、何だかんだ切ちゃんと以外で、同じ部屋で二人きりで生活する事は初めてだつた。まあ、相手は一夏だし、特に気兼ねする必要はないのは有難いけど、シャワーとかの順番は流石に決めておいた方がいいかな。・・・信用してない訳じやないけど、万一の事があった場合、私が冷静ではいられなくなる可能性がある。

「ん~、先に使つてくれてもいいよ。私の場合、了子さんに定期連絡しなきゃいけないし。」

「あ~、そういうやそんな事言つてたな。つて、その連絡は具体的に時間とか決まつてるのか?」

「ううん。了子さん、割と研究とか開発とかで平氣で徹夜してるから。」

「東さんと同じで、その辺は生粹の科学者つて感じだよな、あの人。」「流石に食事はちゃんと三食とつてるけどね。・・・まあ、それはともかく、シャワーに関しては先に使つて。時間とかは今日は初日だし、後で追々決めるつて事で。」

「了解。じゃあ、先に浴びてるぜ。」

一夏はそう言つと、着替えを持つてさつさとシャワールームへ入つていつた。まあ、定時連絡は早めにした方がいいし、さつさと済ませてしまおう。

私は荷物の中にあつたノートPCを電源に繋ぎ、諸々の機器を繋いで立ち上げると、私達用に作られた専用の通話アプリを起動して、了子さんと通話を繋げた。

ただ、後にもう少し時間をずらしてから通話していれば、その後の

悲劇（）は回避出来ていたかもしれない、私は思つてしまつた。